



遺す



小城ゆり子

【一】紅葉の里で

「紅葉の里」は、東京都下の八王子市内にある有料老人ホームである。広葉樹の林に囲まれた閑静な住宅地にマンション風のたたずまいで建っている。以前ここを訪れたときは、ちょうど秋で、文字通り紅葉が燃えるように赤かった。今は冬で、寒空の中に枝だけが凍って見える。私は雪子叔母の葬儀に向った。

雪子叔母の見舞いに来るつもりでいたのだが、なにしろ私のいる千葉市から八王子まで電車で三時間もかかるので、先延ばしにしてためらっているうちに、叔母の訃報を受け取ってしまったのだ。

お正月の葬儀で、私は義理のいとこ、啓子と再会した。

大学を出て何十年目かである。彼女に昔の面影はない。皆と同じに喪服を着て、静かに座っていた。

昔の面影はなくても、この人が啓子さんだとわかった。

「啓子ちゃん」と、私は彼女に近づいた。

「あなたに連絡するにはどうしたらいいのかしら？ 住所、教えて。何かあったときは、お願いしたいから」

啓子はベテランの女弁護士なのだ。

「ええ」

彼女は、私の差し出した手帳に、住所を書いてくれた。

「電話は、事務所にして。うちは、私一人で、誰も他にはいないから。留守にすることが多くて」

「一人？」

「そう、一人なの」

「良いわねえ」

「え、でも、年をとるとね、心細くて」

「そうね。照子叔母ちゃんも、雪子叔母ちゃんが亡くなって、今は一人だものね」

啓子はずっと結婚もしないで、職業一筋に生きてきたのだった。

雪子叔母の葬儀には、親戚の人たちが大勢来てくれた。所は、紅葉の里の近くの葬儀場である。喪主は、紅葉の里で雪子叔母と二人で暮していた照子叔母である。葬儀は親戚だけでうちうちでやる、ということだったのに、照子叔母は、費用を張り込んで、盛大に式をやった。

雪子叔母と照子叔母とは、どちらも、私の亡くなった母の妹である。母には他に第二人がいたが、ともに故人となり、雪子叔母亡き今、照子叔母は一人遺されている。彼女も、生涯結婚しなかった。雪子叔母の方は、未亡人で、子供はいなかった。

通夜から告別式、一晚、私は姉妹と紅葉の里のゲストルームに泊まった。名古屋市に住む姉久子と、千葉市に住む私、市川市に住んでいる妹玲子の三人である。父母の法事以来、久しぶりの姉妹再会だった。他に、新潟県の瀬波温泉にいるいとこの紀子と世津子の姉妹が泊まった。紀子

は瀬波の旅館、青空旅館の次女だが、長女の世津子が恋愛結婚して実家を去ったので、自分が跡を継いでいる。なかなか縁に恵まれず、四十代で遅い結婚をした紀子には、子供はいない。私たちは、このいとこたちとも、久々の再会だった。

紅葉の里は、デラックスなホテルのような老人ホームである。

「いいわねえ、こんな所に入れる人は」

「そうね、私たちには、縁がないわね」

「ところで、いいの？ 青空旅館の女将が、家をるすにして」と紀子に言うと、

「だって、お客がないんだもん」と彼女は言う。

「お客がない……旅館、はやっていないの？」

「まあ、細々とやっているけれど」

「ふうん」

不景気な時代である。旅館経営も大変なのであろう。

「雪子叔母ちゃんの叔父ちゃん側の親戚って、啓子ちゃんたち兄妹は皆来てくれたけれど、加藤家の人たちは誰も来てくれないのね」

「加藤家の人たちとは、犬猿の仲なのよ。何でも、あの人たち、叔母ちゃんを叔父ちゃんと同じ加藤家累代の墓には入れないって、がんばっているらしいわ」

「加藤家のお墓に入れない……叔母ちゃんは、ちゃんとした正妻じゃない。妾じゃあるまいし」

「そんな常識は通じないのね。もう関係がこじれてしまっているんだって」

「ふうん」

有能な弁護士だった亡き叔父には、姉と弟がいた。加藤家というのは、その弟の方の加藤和夫氏とその子供たちのことで、ここには複雑な事情があって、以前から叔母雪子とは犬猿の仲であった。啓子たち兄妹は、叔父の姉の子供たちである。

雪子叔母は私にとって、あこがれの人だった。

雪子は青空旅館に生まれ、海軍法務官の叔父に嫁ぎ、叔父の出征後、実家でじっと夫の帰りを待っていた。だが、捕虜の裁判につらなれた叔父は、戦後、BC級戦犯にされてしまった。叔母は囚われの叔父を、じっと待ち続けた。近所には、戦地から次々と兵士たちが帰ってきた。その夫たちを迎えて、妻たちは次々と身ごもっていく。叔母は、その女性たちがうらやましくてならなかった。子供がほしい。赤ちゃんを産みたい。早く叔父に帰ってきてほしい。

叔父は帰ってきたが、子供はできなかった。弁護士になった叔父に、経済力がなかったわけではない。妻を愛していなかったわけでもない。だが、なぜか子供はできなかった。

子供のない叔父夫婦のことを、私の父方の祖母が、父母の次女である私を叔父夫妻の養女にするといい、と言っていた。それはそれだけのことだったのに、私はその話を本気にして、雪子叔母に迎えられる日を心待ちにしていた。私は母よりやさしい叔母に、あこがれていた。父と共働きの母は、職業人としては人々に尊敬されていたが、家庭では生活に追われて、怒ってばかりいた。ヒステリックな母より、私は叔母を慕っていたのである。

私たちは、毎年、夏休みに瀬波に行き、そこでひと夏を過ごした。叔父や叔母も来ていて、そ

ここで私は叔母たちと交流があったのだ。

しかし、叔父たちが私を養女にすることはなかった。叔父は、自分の血を引く姪を養女に迎えた。それが、啓子である。

叔父の姉には、男の子が一人と、女の子が五人いた。長男は、中央大学夜間部を出て、司法試験の勉強をしていた。親たちには息子を遊ばせておく余裕はない。長男の生活は、その妻がみていた。長女の芳子は、気立ての良い娘だった。親たちは、出世頭の叔父の許に、芳子をよこした。「東京で就職させてほしい」と。

雪子叔母はぶつぶつ言っていた。「東京で就職って、器量は悪いし、頭も悪い、そんな娘に就職口なんて」。結局、芳子は叔父の秘書兼叔母の家事見習いになった。性質の温良でやさしい芳子は、やがて叔母のお気に入りとなる。

その後、叔父の姉は、次女の啓子を養女によこした。啓子は、抜群に頭が良く、将来、女弁護士になって叔父の跡を継げるようになる、というのだ。

しかし、子供のほしかった叔母だったけれど、啓子とはうまくおりあえなかった。彼女のために、二階に部屋を新築して迎えたのだが。口の悪い私の母などに言わせると、「啓子ちゃんは雪子の手伝いを何もしない。勉強ばかりしていて」となる。啓子は努力家だった。田舎では抜群の成績でも、東京ではぱっとしない。でも、高校受験で二流校にまわされても、大学受験のときも「ま、女子大程度ですな」と言われても、がんばって中央大学の法学部に進んだ。よく勉強する子だったが、雪子叔母には気に入らなかった。誠実でやさしい子だったし、それに、受験を控えた娘が母親の家事を手伝わないのは、何も特別な例外ではなかったのだが。

「芳子ちゃんは雪子の手伝いをよくするね」と私の母は言っていた。叔母たちは学校の成績の良い啓子と、そうでない芳子とを、差別した。啓子は養女、芳子は秘書兼家事見習いである。叔母は自分のお気に入りの芳子を養女にしなかったことで、後に酷いしっぺ返しにあうのだが。

叔父は啓子に期待していた。が、いつも黙っている、愛想のない叔父である。「叔父ちゃんと話していても、叔母ちゃんと話していても、ちっとも楽しくない」と、この家の暗い雰囲気になんて耐えられない啓子は、兄の家に家出する。兄は、司法試験の勉強をしている……いわば浪人である。

「啓子、おれたちには、お前の面倒をみてやる余裕はないんだよ」と兄は言う。暮らしは、兄嫁の働きで、なんとか成り立っているのだ。

啓子が何も言わずに家出したので、叔母は困っていた。甥のところに電話したら、ここに来ていというので、やっと安心したが、それまではいったいどうなったのかと不安だったのだ。帰ってこないなら、養子離縁したい、と叔母は主張する。叔父は困惑していた。妻と姪の間に入って困っていた叔父は叔母に押されて、ついに養子離縁を持ち出した。

「私、帰る！」啓子は決心した。大学は続けたい。叔父から援助してもらわなければ、学費も生活費も出所がないのだ。田舎の親たちに資力はない。大学を出て、司法試験に合格するまで、叔父の家で我慢しなければならない。それくらいは、聡明な啓子には充分わかる。

帰ってくるならいい、と叔母も譲歩した。

やがて啓子の大学卒業。

叔母は、若い弁護士を探してきた。その人のところに嫁入りするように……と啓子に求める。啓子は拒否した。彼女は自分が弁護士になりたくて、今まで勉強してきたのだ。弁護士の妻になりたかったわけではない。

叔母の家に出入りしていた私は、自然、啓子と交流があった。

「女だって、結婚だけが人生じゃないと私は思うの」と言う私に、啓子も、「私もそう思うわ」と言っていた。

しかし、もうそれなら養子離縁だ、と叔母はまた主張する。

このとき、啓子の兄は、めでたく司法試験に合格し、司法修習生の期間も無事に終えて、弁護士になっていた。

「いいよ、啓子、今なら兄さんもお前の面倒をみてやれる」と、兄は引き受けた。

啓子は叔父の家から離縁し、兄の許に身を寄せた。

子供のほしかった叔母だけれど、自分の産んだ子供でも、自分の思うようにはならないのだと、わかっていなかった。子供は、実子でも、養子でも、親の思い通りにはならない。そういうものなのだ、と子供を産んだことのない叔母には理解できない。

啓子は、何度か司法試験に挑戦して、合格した。

田舎にいる叔父の弟が、自分の娘を叔父の家に下宿させた。東京の女子大に通う清子である。明るくて愛想の良い清子は、「伯父ちゃん、伯父ちゃん」と叔父に甘える。甘えられて、初めて娘を持ったような気になった叔父は、喜んだ。愛想はないが、ほんとうは心のやさしい叔父だった。戦争と、戦犯体験とで、心も暗く沈んでいたのだ。その上、子供にも恵まれず……その悲しみを知っている叔父と、愛嬌者の清子とは、仲良しになった。二人は家で仲良くした。

叔母は、清子に夫を奪われたような気持になった。何も不倫めいたことを疑うわけではないが、仲良く父娘(おやこ)ごっこをする二人のそばで、雪子は恪気に胸をかきむしられた。四年間だけだ、女子大の四年間が過ぎたら、清子もここを出て行くだろう……と、じっと我慢した。

卒業し、就職しても、清子は出て行かなかった。さすがに、結婚したときは、出て行ったが。叔父夫妻は、家を改築する計画を立てていた。立派な檜を使って、理想的な家を建てよう、と考えていた。

そこに、清子がやって来た。

「うちの人が、伯父ちゃんたちと同居しても良いって言ってるの」

「そうか。それならいっそ二世帯住宅を建てよう」と叔父は小躍りする。

どう言えば反対できるのか……叔母は考えあぐねていた。

二世帯住宅が建った。清子の夫、谷川はもちろん、財産目当てである。

しかし、次々と三人の子が生まれ、叔父はまるで孫を得たように嬉々として喜び、子をかわいがった。

そして、叔母の忍耐の上に、平和な生活が続いたのだが、突然、叔父は脳梗塞を発症、病に倒れた。もう弁護士などしてられない。叔母は夫を入院させる。その後も、家庭で介護できない

叔母は、金の力で次々といろいろな病院に夫を入院させ、付添婦も付けた。ほんとうは病院を代えたりしたくなかったのだが、一つの病院にずっと長く叔父を入院させておくことは病院が認められなかった。付添婦も、次々と代わった。

「私、一日でも長く叔父ちゃんより長生きしたいの」と叔母は言う。「私が先に亡くなったら、叔父ちゃんがどうなるか、心配で」

「叔父ちゃんには財産があるじゃない」

「でも、お金があっても、もう自分で生活していくことができないから」

「財産を人にあげて、その代わり、その人に面倒をみてもらえばいいじゃない」

「だって、その人にいいようにされても、もう叔父ちゃんにはどうすることもできないから」

叔母は、清子とその夫のことを信用していなかった。

「芳子ちゃんを養女にしとけば良かったのに」

「そんなこと……そんなこと今頃言われても」

もう他家へ嫁に行った芳子のことを、今更言われても、叔母にはどうすることもできない。が、芳子を養女にしなかったのは、叔父夫妻の失敗だった。

叔父が病に倒れて、八年たった。

ある日、叔母の許に電話があった。

「奥様、すみません……」

付添婦が泣いている。

「えっ、どうしたの？」

「旦那様が……」

「主人が？ 主人がどうかしたんですか？」

「お亡くなりになりました……」付添婦の泣き声は、ほとんど声にならない。

「えっ？」

「お亡くなりになりました……」

「亡くなったって、なんで？」

「うどんを……喉に……詰まらせて……」

「ええっ？」

「すみません……奥様、すみません……私がいけなくて……」付添婦はおいおい泣いている。

「ごめんなさい……私が、もっとゆっくり、食べさせてあげれば……」

平成二年の年の暮れのことであった。

私は夫とともに、葬儀に出席した。

喪主は当然、叔母である。叔母は葬儀委員長を叔父の仲間の弁護士に頼んだ。が、葬儀の間中、ことあるごとに谷川氏がしゃしゃり出て、まるで自分が喪主であるかのように振舞おうとする。見苦しかった。

叔父の財産は、彼がまだ元気だったときに書いてくれた遺書により、全額妻である叔母のものになった。これは、叔父の弟、加藤和夫氏が、以前に、叔父の家の二階が将来清子のものになる

よう、遺書を書いてほしい、と頼んだのだが、そんなことを頼まれた叔父が激怒して、遺産は全額妻のものにという遺書を書いたのである。

しかし、谷川たちは、家を出て行かなかった。一階に叔母が住み、二階に谷川と清子、その子供たちが住む、という事態が長く続いた。

「しかたなく我慢しているのよ、私の面倒をみてくれるって言うから」と叔母は言った。

「ほんとに面倒をみてくれるの？ あてにしていいの？」

「だって、私が病気になったら、施設に入れるか、自分が介護するかしかないから、施設に入れてくれるでしょう」

こうしてこの状態が十年も続いたのだが、もともと雪子叔母は清子が嫌いなのだった。

ある年の二月、叔母が確定申告の準備をしていたら、そのそばに清子がやって来た。

「まあ、伯母ちゃんってお金持ちなのねえ」清子はうっとりした。

数日後、彼女が伯母に言った。「ねえ、うちの広を、伯母ちゃんの養子にしてくれない？」

末っ子の広を養子にしてほしいという。

広はかわいかったが、叔母は清子の子を養子にするのは、ごめんこうむりたかった。断った。

また何年かして、リフォーム会社がこの家に目をつけてきた。地震が多いからと、耐震工事を勧めてきた。

「まあ！ リフォーム会社なんて、主人が老女だと知って、いんちきを押し付けてきたのよ」と清子があわてた。伯母の財産が少なくなってしまう！

谷川が言ってきた。「ぼくが、財産管理しましょうか？」

谷川家は子供たちが成長して、進学にお金のかかるときになっていた。

叔母は一人、泣いた。とうとう財産を盗られてしまう……。

そこへちょうど妹の照子叔母がやって来た。照子は、長い間、高校教師をして、一人で自活していたが、ついに定年を迎えたのである。この姉妹の他のきょうだいは、私の母も、二人の叔父も、すでに他界している。

「私、今度、八王子の紅葉の里という有料老人ホームに行こうかと思うの」と照子が言う。

「私も年だし、これから先のことを考えると、それが一番いいと思うの」

「あ、それなら、私も連れて行って」と雪子叔母はとびついた。「私も、そこへ行きたいわ」

そうだ、その手があったのだ。

谷川が財産管理を言い出したという話を聞いて、照子も納得した。二人一緒に紅葉の里へ行くことになった。

清子たちには秘密にして、こっそり出て行ってしまおう、と叔母は考えた。荷物も、二階に住んでいる谷川一家には気づかれないよう、こっそりとその目を盗んで支度した。紅葉の里の部屋は狭いから、荷物もほんの少ししか持って行けないのだ。

そして、引越しの日。

清子たちには青天の霹靂だった。

「あっ、伯母ちゃん、いったいどこへ行くの？」

「私は有料老人ホームへ行きます。あなたたちも、早くここを出て行ってね」

雪子叔母は、小さいトラックに荷物を積んで八王子へ出発した。

叔母たちは、杉並のこの家は一階と二階に分けたアパートとし、二所帯に貸そうと考えた。で、谷川一家にはここを出て行ってほしいと頼んだのだが。

自分たちにここを出て行けというのは、不当である、と谷川は裁判に訴えた。自分たちは、ちゃんと雪子伯母の面倒をみるつもりでいたのに、伯母のほうが勝手に出て行ったのだ。自分たちに非はない、という。

雪子叔母が困っていたので、照子叔母は弁護士の啓子に相談した。啓子は、雪子側が谷川たちに二百万円の立ち退き料を払うことで和解を成立させてくれた。清子たちは出ていった。

だが、問題はまだ解決しなかった。

田舎に、叔父が建てたお墓があり、叔父の遺骨を埋葬してある。

清子の母親が亡くなった。その遺骨を、同じお墓に埋葬していいか、と清子の父親、加藤和夫氏が聞いてきた。雪子は快く承諾した。

その後、雪子は認知症を発症してしまう。

雪子と照子、姉妹二人の平和な生活は長くは続かなかったのだ。照子は姉の介護に明け暮れた。

そこへ、加藤和夫と清子たちが、紅葉の里に乗り込んできた。そして、すでに判断能力を失っている雪子と、雪子を守っている照子に向って、宣言した。田舎の加藤家のお墓には雪子はいれない、と。雪子などの入っているお墓には、お墓参りしたくない、と孫たちが言っているという。

そして何年かたって、雪子は逝った。

当然、お墓の問題が浮上する。

「姉さんを義兄(にい)さんのお墓に入れられないなんて。姉さんは、義兄さんを愛していたし、自分も当然義兄さんのお墓に入れるものと信じていたのよ。あんなに愛し合っていた二人を別れさすなんて、私にはできない」と照子は私たちに言う。「そんなの、酷いじゃない。田舎のお墓がダメなら、義兄さんのお骨を分骨してもらって、加藤夫妻のお墓を別に建てたいの」

それがなかなかできないのだ。加藤和夫がなんやかんや言って、承知しない。叔父夫妻のお墓のために、照子は近くのいろいろな墓地を見て回ったが、和夫氏があそこはダメ、ここはダメとぐたぐた言うため、なかなか決まらない。

遺産相続。

やり手弁護士だった叔父は、相当な遺産を叔母に遺した。それらは、ほとんど手付かずのまま、私たちに遺された。私たちというのは、照子叔母と、叔母たちの亡くなった姉の娘である私たち三人姉妹と、これもまた叔母たちの亡くなった弟の娘であるいとこたち二人。亡くなったもう一人の叔父には、代襲相続する子供がいない。先に亡くなった叔父の姉弟には当然、相続権はない。

照子叔母は、雪子叔母の生前、成人後見人だったせい、自分一人で財産の分配をしようとした。叔父の出身校である中央大学や、紅葉の里、その他雪子叔母が生前世話になった人たちに多額の寄付をして、その上であまったお金を相続人に分配したい、という。「あなたたちにも一千万円ずつあげられると思うから、楽しみにしてらっしゃい」などと電話で言う。

私はお金のばら撒きには、反対だった。それに、遺産がいったいいくらあるのかわからないが、多額のお金なら弁護士に分けてほしい、と言うと、照子叔母は、雪子が認知症になってから自分が介護してきたのだと言う。

「それなら、寄与分を要求すればいいでしょう。寄与分がいったいどれくらいになるのかも、弁護士に計算してもらいましょう」

私が言うことを聞かないので、照子叔母は怒って、また新たに和夫氏みたいな者が現われたようだ、とこぼす。

「そんなことばかり言って。あんたは、弁護士の言うことなら、聞くの？」

「そうです」

「だって、これまで啓子ちゃんにはお世話になってきたけれど、啓子ちゃんは報酬を受け取ってくれないのよ。叔母ちゃんからお金をもらおうなんて思わないって。だから、頼みづらくて」

「報酬はきちんと受け取ってもらえばいいのよ」

私の姉と妹は、遺産に淡々としている。特に姉などはお金に執着のない人だから、遺産がマイナスにならなければ、つまり自分が逆にお金を支払わねばならないなんてことにならなければいい、と言う。妹は、一千万円もらえればいいそうだ。

瀬波温泉の紀子は、傾きかけた青空旅館の再建のために、お金がほしい、と言う。世津子も遺産をもらったら、実家である青空旅館に融資するそうだ。私は青空旅館は雪子の実家でもあるのだから、その再建のために遺産を使うのは雪子の供養にもなる、と思うのだが。

電話で。

「照子叔母ちゃんが、明後日、瀬波に来るっていうの」

「え？ 何しに？ 紀子ちゃんに実印を捺してもらいに？」

「私、実印は捺さない」

「そうよ。弁護士さんが来るまで、捺さないってがんばらなきゃあ」

「実印、主人に預けておく」

「そう、それがいいわよ。照子叔母ちゃんなんか、お金を自由にして、ばら撒きたがっているんだから」

「ばら撒くなら、青空旅館にばら撒いてほしい」

「そうよねえ」

私は、遺産は、きちんと、法律通りに分けてほしいのだ。その由、啓子弁護士に電話した。事務所の人が電話に出て、「今、他のお客さんとややこしい話をしていますので、終わったらこちらから電話させます」と言う。

ややこしい話がなかなか終わらなかった。随分遅くなってから、やっと電話があった。

「照子叔母ちゃんから、遺産相続のこと、頼まれたんでしょ？」

「ええ、この前、頼まれました」

「照子叔母ちゃんが自分の采配でやりたいらしいけれど、私は弁護士さんにきちんと、法律通り、分けてほしいんです」

「まだ書類を見ていませんので、今度見て、誰にどれをやるか、考えます」

「杉並の家も、何年もかかるかもしれませんが、処分して、税金を払った残りは公平に分けてほしいんです」

「それもふくめて、誰にどれをやるか、考えます」

啓子は、きちんとした弁護士だった。

結婚もせずに、一人で生きてきて……ベテラン弁護士になって。あ、こういう生き方もあったんだなあ、と思った。

専業主婦になどなるつもりはなかったのに、そうってしまった私。状況に流されて、自分を生かす道を見失ってしまった私。自分と啓子との違いに、愕然とした私だった。

自分は当然キャリアウーマンになれるものと信じていた私だったが、状況はそれを許さなかった。病気になって、挫折してしまい、結婚して専業主婦になるという安易な道を選んでしまった。啓子のように着実に努力することをしなかった。そして、子育てがあって、老親の介護があって、気がついてみると、もう他の人が定年退職する年齢になっていた。

流されてきた過去を振り返ってみる。まず、子供のときから……。

子供の頃、私は死の恐怖にさいなまれて眠れない夜が多かった。

死ぬのが怖い.....死んだら自分というものがなくなってしまう。自分の意識がなくなってしまう。何もかもなくなってしまう。自分が死んでも、世界は平然として存在し続けるだろう。しかし、自分はそれを感じないのだから、何もないと同じである。自分がなくなってしまうのが、怖い.....。何もないって、恐ろしい。魂は不滅、と言う人もいたが、私はそんなことは信じられない。

私はまだ物心ついたばかりの子供なのに、死の恐怖に襲われて、眠れない夜が続いた。

なぜこんなに死が怖かったのか、最近、ある人が「それは生れつきのものだ」と言った。精神病になるようなはみ出し人間は、生れつき死の恐怖を持っているのだそうだ。私が後年、双極性障害という病気になったのは事実だが、死の恐怖がもって生まれたものだとは思えない。私は、戦争の中で生まれ、冷戦の中で物心ついたのである。

生まれたのは昭和十八年、太平洋戦争の最中であった。

昭和二十年、米軍は、東京を始めとして、日本の都市を次々と爆撃した。幼い私が母と住んでいた浦和市（現在のさいたま市浦和区）も、五月二十五日、空襲された。

爆撃の音を私は覚えていない。覚えているには、あまりに幼すぎた。が、その体験がなかったということではない。空から容赦なく落とされてくる爆弾、その中を逃げ惑う母の背にしがみついていた原体験。死はすぐそこにあった。

現在、調べたところによると、浦和の空襲は、小規模のものだったらしい。東京大空襲などと違って、小規模だったので、母と私は逃げ延びられたのだろう。幸いなことであった。

母は私を連れて、新潟に逃げた。新潟市の近郊に祖母と伯母たちがいた。幼い私の姉も、すでにそこに疎開していた。

新潟に逃げたのは、幸せだったのか？ 新潟は、原爆が落ちるはずだった。広島と長崎に原爆が落ちて、次は新潟だった。三発目の原爆が落ちる前に、戦争が終わったのだ。後に私は母からその話を聞いた。

子供の私は、どうもPTSD（心的外傷後ストレス障害）にかかっていたらしい。家の近くに小学校があり、ときどき、サイレンが鳴り響く。サイレンが鳴ると、私は泣き出して母の背にしがみつき、逃げよう、逃げようと、泣き叫んだという。大人たちが、大丈夫だよ、もう戦争は終わったんだよ、もう空襲はないんだよ、といくらあやしてもすかしても、私は泣きやまなかったという。

PTSDは、いつか、終わった。代わりにやってきたのが、死の恐怖だった。

戦争が終わって、平和になったのだろうか。

朝鮮ではまた、戦争が起こった。徴用から帰ってきた父は、新潟の師範学校に勤めていたが、組合運動をして、レッドパージにあい、教育界から追放された。母が、働き始めた。

父はいつも、「早く良い世の中にならないかなあ」と言っていた。良い世の中って、どういう世の中か？ 博物館の発明相談係などをしながら、父は社会主義社会を夢見ていた。その父がいたので、私は社会の動きに敏感だった。

朝鮮戦争は終わったが、米ソの冷戦が続く。

昭和二十九年三月、私はまだ十歳だった。第五福竜丸事件が起きる。

南太平洋ビキニ環礁で、アメリカが水爆実験を行った。そこで日本のマグロ漁船、第五福竜丸が被爆した。船員は全員、放射能症になった。後に、無線長だった久保山愛吉さんが死ぬ。

マグロの値段が暴落した。

日本列島には、放射能を含んだ雨が、降りそそぐ。

死の灰。放射能雨。

雨が怖い！

私は、雨の中、必死で傘をさして、家路に急いだ。

雨にぬれるのが怖かった。目に見えぬ放射能が怖かった。

学校で、先生方が、私たちに、映画「ヒロシマ」を見せてくれた。原爆の落ちた広島の様状……。

私は涙いっぱい、感想文を書いた。なんで人間は、こんな恐ろしいものを造ったのか、広島の被害は、あまりにひどい、私は死ぬのは怖いけれど、こんな原爆で死ぬくらいなら十年早くともいいから畳の上で死にたい……と書いた私の感想文は、市の文集に載った。上手だとほめられた。

そのとき、母が教えてくれたのだった。「新潟にも、原爆が落ちるはずだったんだよ」と。

「八月十五日に、新潟市に新型爆弾が落ちる！ という話で、十四日に市内の人たちがみんな逃げてきた。もし原爆が落ちていたら、どうなただろうねえ、近郊にいた私たちも原爆症になっただろうねえ、でも、十五日に戦争は終わった」

調べてみると、十五日に落ちる予定だったのかどうかは、定かではないが、確かに米軍には新潟に原爆を落とすという予定があり、そのため新潟市は大規模な空襲をされていなかった。で、今度は新型爆弾が新潟に落とされるのではないかという噂が広まり、市民は逃げ惑っていたのだった。

なぜ新潟は無事だったのだろうか？ なぜ私は原爆にあわずにすんだのだろうか？ なぜ神様は私を死なせなかったのだろうか？ 私は悩んだ。

いろいろな偶然が、これまで私を生かしてきた。死はすぐ隣にあった。すぐそばにあったと思えば、死は、さらにまた恐ろしかった。

不眠症が続いた。

この時代、アメリカとソ連は次々と核実験競争をし、いつ熱い戦争に発展するかわからない冷たい戦争をしていた。国際情勢に無関心なら気にもしなかったかもしれないが、マルクス主義者を父に持った私は、政治や国際情勢に人一倍関心があった。冷戦が続く……

いつ世界戦争になるかわからない……そして相次ぐ核実験で世界中に放射能がばら撒かれ、人々の身体がおかされる……私もいつ白血病になるかわからない……私は恐怖と不安とで夜も眠れない

いのだった。

(過去 その2) 不登校にもなれないで

現在の子供たちは、すぐ不登校になるが、私の時代には、不登校というのはなかった。いや、ほんとうになかったかどうかわからないが、少なくとも今みたいに流行してはいなかった。今なら、私が不登校にならなかったのは、ふしぎなくらいなのだ。

学校嫌いだった。

それは、教師たちにいじめられたからである。

いじめの……という意識は、教師の側にはなかったのだろう。同じく教師だった母に言わせると、「勉強のほかにもなんでもできて、愛嬌よく、先生、先生、と先生を慕ってくる生徒がかわいられるんだよ。お前はそうでないからね」となる。

私は勉強しかできなかった。不器用で、運動神経が鈍くて、絵も音楽も裁縫も下手だった。

小学校一、二年のときの担任は、恵子先生といって、わが家とは遠縁の女性教師だった。親戚だと、逆に厳しくなるのだろうか？ 恵子先生は、ヒステリックに怒ってばかりいた。

学芸会の出し物は、白雪姫と決まった。

「学芸会に出たい人はいませんか？ 出たい人は手をあげなさい」と先生が言う。

「はあい！」と私は手をあげた。まだ、無邪気だったのだ。先生は黙っていた。

後で、白雪姫の配役が発表されたが、そこに私の名はなかった。

「あとは、合唱隊。合唱隊も白雪姫に出ることに代わりはないんですよ」と先生が言ったので、私は、そうか、合唱隊も、出ることにかわりはないんだな、と幼心に納得した。

その当日、「白雪姫に出る人は、楽屋に集まりなさい」と放送があった。

私が行こうとすると、友だちが、「出る人だけだよ」と止めた。

「だって、合唱隊も出る人だって、先生が言ったよ」と私はなおも行こうとした。

そこへ先生がやってきて、「出る人だけって言ったのに！」と叱った。

それっきり、私は何も言わない子になった。

後で、「ゆり子さんは必要なこともしゃべらない！」と、恵子先生は、私の髪をひつつかんで、殴った。

母は、学校に呼ばれ、教師に叱責された。「ゆり子さんなんて、不器用で、とても学芸会に出せるような子じゃないじゃありませんか。それを、身の程もわきまえずに、私が『学芸会に出たい人は手をあげなさい』って言ったら、『はあい！』って手をあげたんですよ。それで、私がどんなに困ったか」

母は家で言っていた。「そんなに困るなら、出たい人は手をあげなさいなんて、言わなければいいのにね」

その頃の学芸会は、出演者は、教師が決める任命制だった。そして、小学校から中学校を卒業するまで、私は一度も晴れの舞台に出してもらえなかった。いつも、教師たちは、成績の順に出演者を決め、成績が一番の私は抜かすのだった。

心の中に劣等感が育っていた。

小学校三、四年のときの教師は里見先生といった。この先生は、私の父母に言わせると、「昔は、校長の子は、バカでもチョンでも師範学校に入れてもらえたんだ。里見先生は、とても師範学校に入れるような成績じゃなかったんだが、校長の子だということで、お情けで入れてもらえたんだ」とのことだった。

この先生は、毎朝、毎朝、二宮金次郎の話をする。それも、きまって、「二宮金次郎さんは、薪を背負って勉強しました」という同じ話。それ以上の進展もない。二年間同じ話をされて、私はすっかり金次郎嫌いになった。

あるとき、その先生が、「明日は、ガラス拭きをするから、布を持ってきなさい」と言った。で、ガラス拭きのとき、私は持参の布でガラスを拭こうとしたが、級友が、「ダメ！　ここはおらが拭くんだ！」と拒否する。

他のところへ行っても、別の級友が「ダメ！　ここはおれのところ！」と拒否する。

どこへ行っても、拭かせてもらえない。

私は悲しくて、泣き泣き、歩いていた。

掃除が終わって、里見が、私を叱った。「なんで、お前だけ、ガラス拭きをしなかったんだ！　先生はちゃんと見ていたんだぞ！」

「布を持って来いと言ったのに、持っても来ないで！」

私が持参の布を見せたら、「なんだ！　そんな、紙なんて！」と怒った。白い布が彼の目には紙に見えたらしい。

私はしくしく泣くことしかできなかった。

書道の時間。里見は私が習字が下手だと怒った。「ほら、こう書くんだ」と私の手をとって書かせ、「力を入れるんじゃない！」とどなる。力強い字を書きたくて、手に力を入れると、「ほら、また力を入れる！」と怒る。「こんな字を書いて！」

あげくのはては、私の書いた習字を皆に見せ、「皆さん、こんな字を書かないでくださいね！」と叫ぶ。

夏休み、宿題の習字ができないで、困っていたら、四歳年上の姉が、ていねいに教えてくれた。

「力強い字を書くって、手に力を入れることではないんよ」

姉が教えてくれたので、私は上手に習字が書けた。

その宿題は、学校で金賞をとった。が、里見は、「これは家の人に書いてもらったんだ！」と決めつけて怒った。そう思うなら、賞なんてよこさなければいいではないか。

私はまたも一人で泣くしかなかった。

小学校五年、六年、中学一年のときのそれぞれの担任は、良い先生だった。暗い学校時代のそこだけが明るい光りのようだった。「ヒロシマ」という映画を見せてもらったのは、五年のときである。

中学二、三年のときの担任は、不幸なことに、私の一番苦手な体育の教師だった。体育のほか

に理科も教えていたが、この教師、田村先生は、なにしろ私が体育ができないのが不満なのだった。

「生れつき運動神経の鈍い子もいる」とわざわざ私の方を見て言う。通知表に「体育も大事な科目ですから、ばかにしないように」などと書き、「性格が暗い」と書いてきた。田村は私などよりもっと性格が暗いではないか。

体育の時間、私がへまをすると、生徒たちがそれを待っていて、「わあっ！」と騒いで喜ぶ。人がまじめにやっているのに、なんではやしたてるのか。教師はかばってくれない。一生懸命やっている級友を笑ってはいけないと、注意してくれない。自分がやるべきことをやらないで、私ばかり責める。

そして、理科の時間も、いつも私の方を見て、授業する。なんで私の方ばかり見るのか。私はまるで自由がなかった。

そして、田村は、忙しい私の母を呼びつけて、文句を言った。「他の生徒が行儀悪くしていても、何も感じないが、ゆり子が行儀悪くしていると、ほんとうに腹が立つ！」

彼は私に何か期待していたのかもしれないが、私は彼に嫌われていると思っていた。だから、二年から三年に組換えするとき、当然、私は他の先生の組になると思っていた。私を嫌っている田村が、私を自分の組にするはずがない、と信じていた。

だが、ふたをあげてみると、私はまた田村の組なのだった。

そんな、ひどい……私はつらくて、家で泣いていた。なんでこんなひどい仕打ちを受けなければならぬのか。私があまりにさめざめと泣くものだから、心配した母が、「ママが学校に行って、違う先生の組にしてもらおうよう頼んであげようか？」と言ったが、私はそんなことはできないと知っていた。

私は親を学校に呼び出されるようなことは、何一つしなかったのに、田村は忙しい母をことあるごとに呼びつけて、文句を言った。あまり文句ばかり言うものだから、ついに母は、「じゃあ、私の勤めているT中学に転校させましょうか？ 引き取りましょうか？」と言ったのだが、そうすると、田村は、「それは困る」と言うのだった。

中学を卒業するとき、私はせいいっぱいの反抗をした。それは、田村の薦めるN高校を受験せず、それより一ランク下のS高校を受験したのだ。

田村は怒った。「なんでゆり子はN高校を受験しないんだ！ 学校の体面(めんつ)つてもものもあるんだ！」

「本人の希望ですから」と母は言った。「それに、S高校の方が近くて、通いやすいですし。父親の母校でもありますしね」

後で私は、やはりN高校を受験すれば良かったかな、と少し後悔した。

（過去 その3）初恋

私は新潟県の田舎で育った。私の父母は、村を出て行き、戦争で疎開して戻ってきたのだ。私は非農家の学校の先生のうちの子だった。それで私は、級友たちに疎外されていた。

農家では、子供たちは重要な労働力としてあてにされていた。一応学校にはやってもらえるけれど、帰れば、農作業が待っていた。遊ぶ自由もない。遊ぶ暇も、勉強する暇もある非農家の子は、うらやましがれ、ねたまれた。

「おれたちだってな、お前みたいに勉強させてもらえるんなら、学校の成績もお前より良くなるんだ」と言われた。

下校時、女の子たちが一団となって家路に向う。すると、途中で、男の子たちが待ち構えていて、女の子のうちの私めがけて襲いかかる。「わああっ！」と他の女の子たちは逃げていく。男の子たちは、私を蹴って、殴って、乱暴する。毎日、これが続いた。

冬。雪の日、男の子たちは私を雪の塊の中に投げ入れ、「わああっ！」と逃げて行った。窒息しそうになって、私はやっと雪の中から這い出てきた。私は死ぬところだったんだ、あの子たちは私を殺そうとしたんだ、このことを私は一生、覚えていよう、と思った。

男の子たちも、女の子たちも、誰も助けてくれなかった。

新島誠も、助けてはくれなかった。彼は自分で私に手出しすることはなかったが、そばで見ているだけで、助けてはくれなかった。私は彼に助けてほしいと彼の方を見るのに、彼はいつも黙っていた。

誠は、農家の子だったが、どこか他の子とは違っていた。小さいインテリというべきか。勉強もできたし、私と違って、スポーツもでき、器用で、リーダーシップもあった。先生方にかわいがられていた。

その彼が、私の初恋の人だった。

「死んだらすべてなくなるのね」と私が言うと、彼は、

「魂は残るさ」と言う。

彼は何を信じていたのだろうか？ いつも、「魂は残る」と言っていた。その言葉通り、現在、大学の教官を定年退職した彼は、ダンテの「神曲」の研究に没頭している。

初恋は胸にしまっておいた。

そして、いつの頃からか、男の子たちも、私を襲わなくなった。皆、思春期がやってきていた。

私は級友たちと仲良くなった。長い間、孤独でいた私だが、女の子たちは、私からうちとけていけば、快く迎え入れてくれた。

そして中学に入って、転校生の川田啓輔が来た。

啓輔は、同級の川田静男のいところにあたる。新潟市にいたが、両親に死なれ、姉弟三人孤児になって、親戚の静男の家に引き取られてきたのだった。姉は家出して、行方が知れない。啓輔は妹と二人、親戚にやっかいになって、そこが農家なので、作男をやらされていた。

啓輔は、抜群に絵がうまかった。啓輔の描く風景画を見ると、暗いその風景の中に引きずり込

まれていくような気がする。私はこれまでいろいろな絵を見てきたけれど、啓輔の描いた絵は、そのどれよりも優れていた。名画ともいえる。

この当時、この中学では、二年生になると、英語が選択科目になった。英語か、職業科か、どちらかを選ぶのだ。当然、進学組は、英語を選ぶ。啓輔は英語を選ぶことを許されていなかった。将来、親戚の家を出て独立しても、定時制高校に通うことも不可能にされていた。英語ができなければ、定時制で学ぶこともできない。

私が英語のノートを開いて書いていると、啓輔はそれを脇から覗き込み、「おれも英語、わからなくなったなあ」とつぶやいた。

啓輔がかわいそうだった。その境遇に同情した。

あるとき、図画の先生が、「男の子は女の子の絵を、女の子は男の子の絵を、描きなさい」と言った。

迷わず、私は啓輔の方を向き、彼の絵を描いた。彼も、私の方を向き、私の肖像画を描いた。

それはそれだけのことだったが、私には忘れられない思い出となった。私は、啓輔のことを小説に書こうと思い、「春から秋まで」という題まで決めた。結局、その小説は完成しなかったけれど。

春が来て、秋が来て、雪深い里にも、早春がやってきた。卒業だった。

「就職したい」「就職したい」と言っていた啓輔だったが、親戚の家は作男の彼を手放さなかった。

私は高校に進学した。

あるとき、高校からの帰り、私は私鉄の駅で電車を待っていた。

ホームに、彼がいた。

いつもの暗い眼をして、私をじっと見つめる彼。私もじっと彼を見つめた。話しかければいいのに、それができなかった。時間だけが過ぎていった。

一年ほどして、同級会があった。が、N高校に進学した新島誠はちょこまかと愛嬌を振りまいていたが、そこに川田啓輔の姿はなかった。啓輔は東京に行った、と聞いた。東京に行けば彼に会えるだろうか？ 私は彼との再会の日を思い描いていたが、とうとうその日は来なかった。東京は、新潟と違って大都会で、旧友と偶然町で会うことなどありえなかった。

啓輔は今も絵を描いているのだろうか？

【二】六十代の夢

夢の中で……。

Aは、山の中で隠遁生活を送っている。現代美術をめざしている彼は、世にいれられず、認められず、一人、仙人のような生活をしている。

その山へ、私は出かけて行く。

Aとの十五年ぶりの再会。

「これを見てください」私は息子の描いた絵を見せる。

「これをあなたの子が描いたのです」

「おお、これはなんという絵だ」Aは驚く。

「見てください。あなたは現代美術とかいって、わけのわからない絵ばかり描いていたけれど、あなたの子はまだ子供なのに、こういう絵を描くのです。あなたとお別れしてから、私はこの子一人に賭けてきました。その努力が実ったのです」

「この子は確かにわしの子だ」

「そうです、あなたは世にいれられなかったけれど、この子は、立派な画家になるでしょう。それを信じて、私はこの子を教育してゆきます。それがあなたと一緒にいられなかった私の人生なのです」

私は勝ち誇って宣言する。

私は目が覚めた。まだ夜は深い。

今を書けばいいのだ、今のが優れた小説になるのだ、と夢を反芻しながら、私は考える。今の夢を覚えておかなければ。ぜひ書かなければ。

しかし、このところ、私はこれに類する夢ばかり見ているけれど、朝、はっきり目が覚めてみれば、みな、どうってことない、優れた小説などではなく、私が見果てぬ夢ばかりなのだ。

小説家になりたい……と、そればかり思ってきた人生だった。それなのに、いつもほとんど書けなかった。書けないのは病気のためだったろうか？ それとも薬の作用で、精神活動を不活発に抑えられていたのだろうか？

私は双極性障害という病気で、長い間、炭酸リチウムという薬を投与されていた。三十年もそれが続いて、五十代半ばで、その副作用で腎臓が悪くなった。そのため、その薬はなしになった。腎臓は元通りにはならなかった。

が、このときから、私は小説が書けるようになった。いくらでも、どんどん、書けるようになった。でも、すぐには人に認められない。新人賞に応募しても、予選も通らない。カルチャーセンターの小説教室に通うようになったが、なかなか上達しない。私の書くものは、どれも稚拙で、描写が不十分で、書いても書いても人に認められないのだった。

このまま、作家になれぬまま、私は人生を終わるのだろうか。

幼かった頃からの不安が、また、頭をもたげてくる。死が恐ろしかった。自分が何もなくなるのが怖かった。自分がこの世から消えてしまうのが恐ろしいから、生物は子孫を残そうと躍起に

なるのだろう。私に子はできなかった。私のDNAはもう残らない。せめて、後世に残る作品を一作でも書きたい。

六十七歳。老いが忍び寄る……。

この春から、私は足首が痛くて切なかった。

高血圧と骨粗しょう症の治療のため通っている診療所に朝、行く予定になっていた。夫が車で送ってくれるという。それを当てにして、駐車場に行ったら、車がなかった。

「正一が乗って行ったんだな」と夫が言う。正一というのは、夫とその先妻の子で、私が育てた。私たち夫婦と正一とは同じ団地内に住んでいて、夫の車は、彼が運転してもいいことになっているのだ。

「私、九時半には診療所に行っていないと。九時半に予約したんだから。もう九時十五分よ。タクシーで行くわ」

しかし、タクシーの電話番号は、手帳に書いてなかった。

困っている夫をそこにおいて、私は一人、歩き出す。早く、診療所に着かなければならない。しかし、そこまでは歩いて二十五分はかかるのだ。

あわてて、早足で歩く。早く、早く行かなければ。急いで……と、右足が痛くなった。「あ、いけない！」と思いながら、痛む足を引きずりながら急ぐ。このときから、私は右の足首が痛くなった。

診療所に遅れて着いて、診察してもらい、薬局で薬をもらって、また歩いて帰る。足首が痛くて切なかった。

足首を痛めたのに、私は整形外科にも行かず、我慢して日常生活を送っていた。四月に夫とあしかがフラワーパークに行って、公園の中を歩き続けた。五月には団地の自治会のバス旅行で、水郷佐原まで行った。太っているので、ダイエットのために、歩くことにしているため、毎日、かかさず、三十分はウォーキングを繰り返した。でも、痛い……。

五月十六日に、近所で、新しい整形外科が開院した。近所といっても、歩いて二十分はかかるのだが。三階建てのしゃれた造りの医院である。

開院の日を待って、すぐに私はそこへ行った。

医師はレントゲンを撮ってくれて、「アキレス腱が炎症を起こしていますね」と言った。

リハビリ治療が始まる。右足をお湯で温めながら、足の指を開いたり閉じたりする。これがなかなか難しかった。その後、右足首をアイス・マッサージする。冷たくした器具で五分間マッサージするのだ。週に二回ずつこのリハビリ治療に通った。

六月十三日、二回目の診察があった。

「どうだね？ 良くなったかね？」

「はい、少し良くなりましたが、まだ痛くて、よく歩けなくて」

「そう？ じゃ、またリハビリを続けよう。今回は、七月十一日に、また診察しよう」

この帰り、右足首が痛くて、痛みをこらえて私は家に歩いて帰った。

家に帰って、その直後、今度は右膝が痛み出した。膝の裏側が痛い……。

翌日、医院に電話した。

「昨日、診察してもらったばかりなんですけれど、今度は膝の裏側が痛くなってしまって、とても七月十一日まで待てないんです。また、診察してほしいんですが」

「そうですか。しかし、今週と来週は診察が満杯で、再来週になりますが。七月十一日はキャンセルして、六月二十七日に来てください」

「はい」

もっと早く診察してほしかったが、仕方がなかった。よりによって診察の直後に他の箇所が痛み出すなど、運が悪いのだった。この医院は、開院したばかりなのに、もう患者であふれているのだ。

だが、もらった張り薬を足首ではなく、膝裏に張ったら、二、三日で膝痛は治った。

なんだ、治ってしまったのか、電話しなくても良かったな、と思った。それから、二回、いつもの足首のリハビリに通った。

六月二十一日は、一泊旅行を予定していた。葬儀社互助会が、会員を草津温泉旅行に招待してくれるというのだ。抽選にあたったので、招待してもらえる。でも、会費は一万円、払ったのだ。

十九日、また膝裏が痛み出した。

これは困った、と思った。なかなか歩けない。旅行はバスで行くのだが、歩くところがあるのだろうか？ 計画書を見ると、二日目に一時間軽井沢銀座散策とある。これは歩かなければならないだろうか？ バスの中で待っていてはダメだろうか？ 軽井沢銀座は前に行ったことがあるので、魅力はない。

しかし、しゃがむと痛い。家のトイレは洋式だからいいが、和式トイレでは用を足せない。バス旅行で、パーキングエリアのトイレが洋式ばかりだといいが、和式が多いと、早く用を足せない。しゃがんでみて、できるかどうか、やってみた。自治会の旅行のときも、老人たちが和式で用が足せないで、洋式を選んでいた。あんなになってしまうのだろうか？ なんとか用が足せそうだったので、安心した。

ところが、二十日、朝、起きて立ち上がろうとしたら、膝に激痛が走った。激痛で、立ち上がれない。立ち上がって歩こうとしても、激痛で、倒れてしまう。

「どうしよう？ 私、明日、旅行に行けない」

「明日になってみれば、いいじゃないか」と夫は言う。

「でも、旅行の途中で、また、膝が痛くなったら」

「じゃ、キャンセルすればいいだろう。七月十五日の旅行もキャンセルすればいいだろう」

七月十五日、飛騨地方に一泊旅行に行く予定だったのだ。七月になったら、膝も治るかと思われたが、キャンセルするなら早く旅行会社に電話しないと料金を取られる。あわてて、電話する。

しかし、膝が痛くて、立ち上がれないのは、どうしたものか。家の中でも、歩けない……。トイレに行くのも、這って行く。いつもの家事もできない。どうしよう？

夫が、料理や洗濯をしてくれた。ありがたかった。

だが、このままでは、私はどこへも行けない。医者にも行けない。カルチャーセンターに行く

など、夢のまた夢。せめて、医者にくらいいは行けないと困る。それが行けないのだ。歩行不能である。どうしたらいい？ 私は泣きたかった。

翌朝になれば嘘のように歩けるようにも思えた。が、しかし、一日寝て、翌朝になって、立ち上がろうとしたら、また激痛で倒れる。

どうしよう？

いずれにしろ、招待旅行はキャンセルするしかない。早朝、緊急連絡先に電話する。

旅行中に痛み出したら、どうしようもなかった。不幸中の幸いというべきか。

テレビで、俳優の誰かが、やはり歩行不能で、入院したと、報じていた。

入院か？

できたばかりの近所の整形外科には、入院設備はない。入院設備のあるM整形外科は、評判が悪い。が、この辺では、そこしかない。嫌だなあ、と思う。

「冷やせばいいんだ」と夫が言う。

膝をアイス・マッサージしてみる。張り薬も張る。必死で治そうとする。

どうなることかと思ったが、これで、翌日になったら、少し激痛が和らいで、杖をつきながらなら歩けるようになった。良かった！

しかし、この日のカルチャーセンターは、しかたなくお休みする。

「医者には行かないのか？」と夫が聞く。

「整形外科は、二十七日って言われたの。それまで待たないと」

しかし、この一週間が長かった。それでも早めに電話しておいて良かったと思う。

二十七日は、夫に車で整形外科まで送ってもらう。

激痛で歩けなかったと言ったら、医師が、ヒアルロン酸の注射をしてくれると言う。

「糖尿病はありますか？」

「いえ、糖尿はありません」

糖尿病があると、この注射はできないらしい。

痛い注射を、一週間ごとに五回、続けて打つという。

「足首はどうしました？」

「あの、足首の方は、膝痛のショックで、感じなくなりました。治ったようです」

「それは良かったね」

リハビリの理学療法士が、膝を調べてくれた。

「筋肉が弱っていますね」

「はい……」

「運動療法をしていきましょう」

「はい……」

「ウォーキングはしていますか？」

「いえ、前はしていましたけれど、膝が痛くて、歩けなくて」

「じゃあ、ウォーキングできるようになるのが、目標ですね」

膝痛の人は、減量するといいのだ。しかし、食事療法はともかく、膝が痛いと言えない

。減量もできない。何という矛盾か。

リハビリの診察も終わって、張り薬ももらい、受付の無料電話から家にいる夫に電話する。迎えに来てもらう。

もうこうなると、夫頼み。買い物も、図書館も、夫に車で送ってもらう。

この週は、カルチャーセンターは、途中までバスで行き、そこからタクシーで行った。

次の週は、整形外科まで、夫がゴルフに行ってしまったので、タクシーで行く。ぜいたくにはすぐなれて、歩いて行くところをタクシーで行くようになった。

一ヵ月こうして、そろそろ歩いてみようかと、団地の周りをウォーキングしてみた。膝痛はいくらか良くなっている。

それにしても、老化は、避けられずやって来る。夫の兄は、狭いマンションで、一人、孤独死した。死んだことに誰も気づかず、不審に思った隣人が警察に通報、警察から長兄のもとに電話があった。家族のいない兄は、兄弟にも何も言わず、一人、亡くなった。警察の囑託医も、遺体の損傷がひどくて、死因は病死としかわからないという。死後、一ヵ月以上たっていた。

生老病死……お釈迦様の言う人間の四つの苦しみ。

死は、やがて私にも訪れるだろう。それまで、生涯の夢であった作家になれたら……六十代の夢は、はかないものに思える。

(過去 その4) 父と母

私の今は亡くなった父母は、ともに教師で、世間の尊敬を一身に集めていた人だった。皆が「立派な方」と言った。特に母のことは、皆がほめそやすので、私は一人、いらいらしていた。私は娘として、父母の「立派」の内実を知りすぎていた。

父はマルクス主義者で、反戦派だった。母はリベラリストだった。その実、二人ともひどい差別者だった。

小さい頃から、私は父母の言動にいらいらしていた。

「くろんぼ」と黒人をばかにする。くろんぼは教養がないと言う。戦後のことで、混血児問題がクローズアップされていたが、私が「混血児も誇りをもつべきだ」と言ったら、母が、「白人との混血なら、誇りもわかるが、黒人との混血なんて、誇りなんて、ありえない」と言った。

アイヌの問題になると、父は「保護してやらなければ、滅びる」と言った。まるでトキのような珍しい動物のことをいうように。アイヌ人が、和人と混血して、純粋なアイヌ人がいなくなるなら、それはそれで良いではないか。

朝鮮人のことは、怖れていた。

村の医者は、金(きん)先生といって、朝鮮人の夫婦だった。医者が少ない村のことで、病気になれば、金先生に診てもらわねばならない。それが母には不満で、私が扁桃腺炎から肺炎になったとき、女医の金先生がストレプトマイシンを打って治してくれたのだが、「金先生のストレプトマイシンのおかげで、ゆり子は歩き方がおかしくなった」と怒っていた。歩き方が外股になったのは、そのせいかどうか、わからない。

ずっと後になってのことだが、父母は、朝鮮学校の生徒が日本人の子供に乱暴すると怖れていた。

これもずっと後のことだが、被差別部落民のことが問題になったとき、母が「部落差別なんて、今もあるのかねえ」とつぶやいた。それで私が「私が部落民の青年と結婚したいと言ったら、ママは賛成することができますか？」と聞いた。すると母は「お前、なんで、そんな、ぜったいあり得ないことを言うの！」と怒った。

父は、共働き賛成派だった。共に学び、共に働くのが、夫婦の理想、と言っていた。だから父は、母を働かせたがっていたが、共働きしても、父は家事も育児も一切手伝わなかった。「おれは、子供のことは、ママに任せているんだ」と言っていた。妻は外で働き、家事も育児も完璧にやるのが理想、なのだった。

そして父は、「女は男に劣る」と持論を展開する。

「料理だって、何だって、一流は男じゃないか」

「女の先生には困る。子供が病気になると、勤めを休む。すると、結局、男がその代わりに働かなければならなくなるんだ」父子家庭になったら、父親が病気の子供の面倒をみなければならなくなるではないか。

父はまた、「女高師出の女は鼻持ちならない」とも言っていた。いつも母の前でそう言うのだ。母は、女高師つまり女子高等師範学校を出ているのだ。しかし、母も、それに歩調を合わせて

、「ほんとに、女高師出の女は威張っていて、どうしようもない。あたしなんか良いほうだ」と言っていた。

父は、「女の子は大学へ行っても、しょうがない」とも言っていた。「男の子は、二十五歳まで頭脳が伸びるが、女の子は十八歳までしか伸びない。だから、女の子は大学に行ってもしょうがないのだ」と、何の根拠があって言うのかわからないが、そう言うのだ。

私が「パパは、私が大学に行ってもダメって言うのよ」と嘆くと、母は「パパは、お前のことを心配しているのよ」ととりなす。私に大学に行くな、学費は出さない、ということではないようだった。

後に、父母の精神障害者に対する差別が、私を苦しめることになる。

(過去 その5) セックスレスカップル

私は幼いころから自慰行為を知っていた。

「ゆり子は布団を抱いて寝る。パパと同じだね。パパも布団を抱いて寝る。風邪ひくだらうに、親子で似ているよ」と母がぶつぶつ言う。布団を抱いて寝るのは自慰行為なのに、何という母だろう。母の鈍感さが嫌だった。

しかし、なぜ父は母を抱かず、布団を抱くのか。

なぜ父は母と抱きあわないのか。

私がいくら早熟でも、子供の頃からセックスがわかっていたわけではない。父は一人で寝て、母は子供たちと寝ていた。それが不自然だと初めからわかっていたわけではない。

教師の母は、夏休みにまとめて家事をしていた。布団の打ち直しなどしていた。布団を打ち直しながら、母がつぶやく。「ママは幸せだよ。パパは貧乏だから女を作れない。貧乏だから、ママは幸せだよ」と、ちっとも幸せそうでなく、母がぶつぶつ言う。

親戚の人が来ると、「ママはここで寝るの？ パパはどこで寝るの？」と不思議そうにたずねる。父母は一緒に寝るものと私は知らなかった。

「あたしは、子供なんか嫌いだ」と母は言う。「自分の子供だから、仕方なしに育ててやっているんだ。子供は三人でたくさんだ。四人目は、嫌だからおろした。ついでに不妊手術もした。子供なんか、いらない」

母は幼い私相手にそんなことを言う人だった。

思春期を経験してから、私は父母のセックスレスに悩んだ。母がかわいそうだった。女として、求められない母をかわいそうに思い、父が憎かった。そうして、自分の身のうちに、満たされない欲望が渦巻いていた。

成長してから、ある夜、父と二人きりのとき、父にたずねたことがある。

「パパとママは、どうしてセックスしなかったの？」

「セックスはしたさ、だから子供ができたんだ」

「子供が生まれてからのことよ。ずっと長い間、セックスしなかったじゃない」

「おれは淡白なんだ」と父は言った。「長女が生まれて、ママは実家に帰ったままだった。おれは気にも留めなかったが、知人が、それなら後妻を世話しようと言ったので、あわててママを呼び寄せたんだ」

またある夜、母が私にしんみりと言った。「ママは、何度も離婚しようと思ったよ。伯母様たちが嫌で」

母は父の姉妹とうまくいっていなかった。

「でも、パパは繊細な人だった。パパが繊細な人だったから、ママは我慢できたんだよ」

母のその述懐を父は隣の部屋で聞いていたのだった。

その夜遅く、私が寝付かれずにいると、父がやってきて、そこに寝ているのが私とわかると離れ、母の寝ている方に行った。

がさごそと音がする。母が着ているものを脱ぐ音だった。

父が去り、母がその後に行く。

あ、セックスするのか、と私は思った。

翌朝、父母は珍しく仲良くしゃべっていた。

戦争があった。

父は出征はしなくてすんだが、遠方の軍需工場に徴用されていた。

引き裂かれていた夫婦が、戦争が終わって、また二人になった。

その当時の夫婦が皆そうであったように、父と母とは激しく求め合った。団塊の世代、妹も生まれる。

マルクス主義者の父は、戦争に反対できなかったことを悔やんでいた。だから今度こそはと思い、組合運動にも走った。

朝鮮戦争。

日本中、いや、世界中を、赤狩り（レッドパージ）の嵐が吹きぬける。

父は職を失った。

「ママはあのとき、逆境にあった」と母は言う。当時、専業主婦だった母は、働きに出よう、と決意する。そのとき、四人目の子を身ごもっていた。

父に相談することなく、母は中絶する。戦後、優生保護法が改正されて、「経済的理由があれば」中絶してもいいことになったのだ。

父は北海道の大学に行くようにと言われた。新潟師範学校の教師だったのである。

「北海道なんて、私は嫌です」と母は拒否した。

「寒いところなんて嫌。戦争で新潟に帰ってこなければならなくなったのも、嫌だったのに。北海道なんて。とんでもない。あなた一人で行ってください。私はここにおいて、働いて、子供たちを育てます」

子供たちのかわいい父は、北海道に行かなかった。博物館の発明相談係、という職についた。

そのときから、父と母との心のすれ違いが始まったのだった。それが十何年もの間のセックスレスという形になったのだった。

(過去 その6) 自由の女神

私の進学した高校は、家から電車を乗り継いで一時間ほど行ったところにあった。旧制中学から新制高校になった学校で、もともと男子の多い進学校だった。私が入学したとき、男子が八割、残りの二割が女子だった。この町には、他に女子高校と共学の職業高校があり、女子中学生は成績がいいとか将来大学に進学する予定とかだこの男子系の進学校に入り、商業事務に就職するのだと職業高校に入り、そのどちらでもない女子だけの女子高校に入るようになっていた。私と同級の女生徒たちは、女子高の生徒たちを自分たちより一段下だとみくびっていた。

一学級約五十人、そのうち十人が女子だった。私は成績は、クラスで一番だった。年に何回か模擬試験があり、その成績上位者の名は、廊下に張り出された。私はいつも十番以内に入っていた。

女子は成績が男子に劣る……女は男より頭が悪い……生徒たちの成績はまるでそれを証明しているかのようだった。だから、私は何とかして女でも成績のいい者もいると証明したくて、がんばっていた。自分が男女平等の責任を負っているような気持になっていた。

そして、ここでは何より成績がものをいったから、小学校や中学校のときのように私が疎外されることはなかった。ここでは私は自由だった。体育ができなくても、非難されることはなかった。

必修科目のほかに、選択科目があって、芸術科と職業科、家庭科のうち、一科目を選ぶことになっていた。ただし、女子は家庭科を選ぶこと、と決まっていた。女に選択の自由は認められていなかった。芸術系に進学したい女子がいたら、あるいは商業事務に就職したい女子がいたら、どうなっていたか？ 一律に女は家庭科、と決められていた。だから女生徒たちは、嫌がっていた。家庭科の時間、教師の言うことなど聞かず、ぺちゃくちゃおしゃべりをして抵抗していた。

家庭科の教師は、そんなことは気にしていなかった。授業時間に生徒が話を聞いていなくても、終始穏やかで、にこにこしていた。感じのいい、すてきな女性だと評判だった。私の母親は、やはり家庭科教師で、この頃、県の教育庁に勤めていた。その母の話によると、我が校の家庭科教師にほれ込んだ先輩女教師が、自分の息子(東大出)と彼女とを見合いさせ、結婚させようとした。だが、その息子が「あんな、欠点のない女性は嫌だ」と断った。先輩女教師は、「ほんとに、うちの息子は、しょうがない。あんないい娘を断るなんて」と嘆いていたそうだ。件の家庭科教師は、そんなことは気にせず、社会科の男性教師と仲良くしていた。この人と結婚する、という噂だった。

私の父は、この頃、教育界に復帰して、職業高校で物理の教師をしていた。毎朝、私は父と同じ電車に乗って、町の高校に通学していた。父の母校でもあった普通高校である。父は同じ町の職業高校に勤めていたのだ。

ところで、私は高校二年のとき、体育祭で学級の仮装行列、「自由の女神」で主役の女神をやることになった。

男子生徒たちが、このクラスの仮装行列は「自由の女神」で行こう、と決めたのだ。華やかに装った女神を、リヤカーに乗せ、クラスの皆が引いていくのだ。しかし、いったい誰を女神にするか？ 女子は十人いる。

女生徒たちは、女神を誰にするか、男子に決めてほしい、と言う。男子生徒たちは、このクラス的女子は皆すてきだから、誰でもいい、十人の中で誰かを選ぶなどできない、女子に決めてほしい、と言う。

私は自分が女生徒の代表者だみたいに思っていたから、女の子たちに聞いてみた。

「ねえ、誰か女神になりたくない？」

女の子たちは、皆、「私は嫌だ」と言う。誰も立候補しない。それがほんとうに嫌なのか、それとも遠慮しているのか、区別がつかない。

「じゃあ、私がやるわ」と私が立候補した。

義務教育の九年間、学芸会などの晴れの舞台には、出してもらえなかった不器用な私だった。晴れの舞台にあこがれていた。で、「自由の女神」になれてよかった。

衣装はどうするか？ 衣装は、洋品店の息子である級友が、洋服の裏地を持ってきてくれた。ピンクのぴかぴか光るきれいな布地だ。それをインドのサリーのように身につける。女生徒の一人が、「お姉ちゃんの結婚式のもの」と言って絹のベールを持ってきてくれた。それをかぶる。そうして私は、女神になった。

(過去 その7) 東大にあこがれる

私の母の妹、照子叔母は、大学出の頭のいい人だった。高校教師をしていて、結婚しない。縁談は降るほどあった。叔母を気に入ってくれる男性は大勢いた。だが、叔母に言わせると、「あれなんか、私よりバカじゃないか」というのだ。

叔母は、男性が自分より頭がよくないと、気に入らないのだ。しかし、彼女より賢い男性というのは、なかなかいなかった。

男は女より頭がよくないといけない……夫は妻より賢明でなくてはならない……男が上で女が下のカップルでなければ、関係が不安定になる……などと、私は思い込んでしまった。そして、そのことが後々まで私を苦しめることになる。

頭のいい男の子を捜さねばならない、私より学校の成績のいい男の子でないと、私は相手にしてもらえない、相手にしてもらっても、それは不安定な関係だから、いつ棄てられるかわからない……などと当時の私は考えた。それが東大生にあこがれた理由だった。

馬場治は、私と違うクラスだったが、模擬試験の順位、一番なので、めだった。スポーツ万能で、成績トップである。ガリ勉ではない。その上、ハンサムなので、女生徒にとってあこがれの的だった。私は、何とかして、彼と友だちになりたかった。

高校三年の冬休みであった。私は、東京で大手学習塾の主催する模擬試験に参加するべく、東京行きの列車に乗った。もちろん、当時、新幹線などない。上越線上野行き特急列車である。

ホームで列車を待っていたら、馬場治も同じ列車を待っていた。すは、好機到来である。私は彼のそばに行った。

「馬場さん、東京にいらっしゃるの？」

「ええ」

「私もよ。模擬試験をお受けになるんでしょ」

「そう」

「東京まで、ご一緒していいかしら？」

私は、随分積極的だった。同じ車に乗って、向い合わせの席に座った。

彼はがさごそやっていた。

「まいったなあ」と困っている。

「どうなさったの？」

「財布を家に忘れてきたんですよ」

「まあ、それは大変」

「いや、東京まで行くことはできるんですよ」

切符はあるのだろう。上野駅には親戚の人が迎えに来てくれているんだろう。

何も話すこともなく、私は持参の参考書を開いて、勉強し始めた。彼は、何もせず、寝ていた。秀才の面目ここにあり、である。

特急列車でも、上野まで数時間かかる。その間中、彼は居眠りをしていた。

お昼になった。

「駅弁、買いませんか？」

「金がないんですよ」

「お金なら、お貸しします」

私は小遣いを多めに持ってきていた。

高崎のあたりで車内販売の弁当を買って、食べて、また私は勉強、彼は居眠り、である。

赤羽駅で、私は彼と別れ、国電に乗りかえた。首都圏を走る国鉄（現在のJR）の電車を、当時、国電と呼んでいた。

それから雪子叔母の家に向って、泊めてもらい、翌日は模擬試験会場だった。高校生が大勢来ていて、治がどこにいるかはわからなかった。

やがて大学入学試験のシーズンが来た。

また私は雪子叔母のところに来て、受験して、合格した。治は東大も慶応も早稲田も落ちた、と高校の友だちから聞いた。ガリ勉せずに入れるほど大学入試は易しくはなかったのだ。

一年間、私は治に連絡しなかった。浪人中は、異性との交際をご法度だろう、と思っていた。一年間、彼なしで、私は学生運動などやっていた。

次の年、彼はめでたく東大に合格した。

私は、彼に手紙を書いた。交際を申し込んだ。交際を申し込む……それだけでなく、彼を学生運動に引っ張り込もうと、手紙でオルグした。オルグというのは、政治運動に引っ張り込もうと働きかけることである。

このオルグは、成功しなかった。交際もしてもらえなかった。それなのに、私は、何通も彼に手紙を書き続けた。今なら、ストーカーといわれただろう。

(過去 その8) 愛は革命の中に

私の入学した大学は、外国語専門の国立大学だった。ロシア語など専攻したのだが、勉強が難しく、なかなかついていけない。私は授業にもあまり出ず、自治会室に入り浸っていた。そこでいろいろな活動家たちと知りあった。

これは一九六〇年代の始めのことである。大学にはまだ、六十年安保闘争の余波が漂っていた。安保闘争の闘士で、大学をドロップアウトしてしまった学生などもいた。小野高志もその一人だった。

私は一緒に自治会活動をしていた矢波明子を通じて、高志を知った。知ったといっても、恋愛関係になったわけではない。高志は、明子の恋人だった。

四国の大実業家の令嬢であった矢波明子だが、安保闘争から革命を目指すようになっていた。同じく革命を目指す小野高志と恋仲になり、学生結婚することになった。明子の親たちは猛反対した。どうしても彼と結婚するというなら、学費も生活費ももう仕送りしない、とがんばった。親から義絶されても、彼女は恋を貫いた。

「学生なのに、どうして、今、結婚するの？」と聞いた私に、彼女は、

「今結婚するのも卒業してから結婚するのも、同じなの。そりゃあ、母は、大学を出てからにしなさいって言ってるわよ。でも、卒業してからにしたって、そんな、革命運動をするような人と結婚しちゃいけないって言うに決まっているもの。同じことだから、今、結婚するの」と答えた。

高志は大学を中退し……中退というよりも、授業単位が足りなくて追い出されたのだが、工場労働者になった。「ヴ・ナロード」。人民の中へ。労働者階級の中へ入った。工場で働いている彼とまだ学生の彼女とが、結婚したのだ。明子は私をオルグしようと、高志と同居している自分のアパートに連れて行った。

高志は、熱っぽく、革命を語った。彼はマルクスを勉強していたので、私にマルクス主義思想を語った。それはとても新鮮だった。私の父親はマルクス主義者だったけれど、私にその思想をくわしく話してくれたわけではなかったのだから、ここで私はほとんど初めてマルクスを知ったのだった。

高志は、自分は知識階級で、労働者階級ではないが、労働者階級の側に立って戦う、と言った。

「私たちも労働者階級ではないの？ 資本家から給料をもらって生活しているんだから」と私は抗議したが、

「知識人は労働者ではない。いったん知識人になったら、生涯、労働者にはなれないんだ」と彼はこだわった。きまじめにストイックというべきか、実は労働者を自分より下に見ているというべきか。

学歴を隠して工場に勤めていた彼だが、まもなく、社会主義党の専従になって、政治家になっていった。

それはともかく、このとき、彼は熱心に私にマルクスを説き、夜遅くまでオルグし続けた。

話が深夜に及び、終電が出てしまって、私は家に帰れなくなった。高志と明子の二人の巢.....狭い四畳半のアパートに、一晩、泊めてもらった。

三人で枕を並べて寝て.....寝てから、明子の「わああ！」という歓声が聞こえた。私は驚いて、思わず、「どうしたの？」と聞いてしまった。

高志が明子から離れる音がした。

あ、いけない.....事態を知った私は、自分の失態だと思った。二人の邪魔をしてしまった、と気づいたのだ。私はショックを受けていた。

翌日、友人たちの集まりで、高志と明子のささやかな結婚式があった。

ショックのまださめぬ私は、演説をした。お二人の愛こそ、革命運動の中のほんとうの愛だと思います、真実の愛は、革命の中にこそある、と思います、と述べた。

明子はブルジュワのお嬢さんなのに、実家からの送金を止められて、貧しい生活に耐えながら高志との愛を貫こうとしていた。そんなこと、私にはとてもできない、と思う。私は金持ちの娘ではなかったが、父親からの送金で遊んで暮らしていた。できないと思う一方で、私は、革命運動の中の真実の愛なるものに、あこがれていた。

真実の愛は、革命の中にある.....と考えていた。

(過去 その9) 発病

私はなぜ双極性障害になどなったのか。二十代から三十代にかけて、病気ばかりだった。それをなぜか、究明してみても、今は何も始まらないような気がする。発病したのは、マルクス主義派のせいだろうか？ もちろん、きっかけはそこにあった。しかし、それは単なるきっかけに過ぎなかったのではないか。きっかけにこだわることに何か意味があるだろうか？ 意味はなくとも、それを語らないことには、私の人生を語ることにはならないだろう。それはどういうことだったのか。

私は大学の三年生になっていた。大学にも行かず、家で文学に浸り、小説など書いていた。そのときの小説。ラーコカコという麻薬が世界に蔓延する。ラーコカコはすばらしい快樂を与えてくれるのだ。人々は、政治のことなど忘れ、愛し合うことも忘れて、この薬の快樂に酔いしれる……。

コココーラの会社から抗議が出そうな小説だった。

でも、書いているだけではダメだな、実践しなければ、と思い、大学に出かけていった。

キャンパスで、自治会長の吉田に出会った。吉田とは同じクラスなので、よく知っていた。

「新しい学生運動をしないか？」と吉田が誘う。

新しい学生運動？ 何のことかわからない。わからないのに、なんとなく、吉田のやっている学習会に行った。

気分で引きずられていた。

「新聞部に入ってほしいんだ」と吉田に要請された。

「新聞部が、思想的に限界にきているんだな。そこを立て直してほしい」

新聞部が、吉田たちマルクス主義派と対立する共産主義派の拠点であると、私は知らなかった。マルクス主義派の介入戦術。共産主義派に入っていくと、そこを根こそぎオルグする。自分たちのものにする。そのために私を新聞部に送り込んだのだと、私は知らなかった。

これは昭和四十年の頃のことである。この数年後、共産主義派と他の派閥との全共闘運動が勃発する。そして、それが下火になった頃、共産主義派とマルクス主義派との血で血を洗う凄惨な内ゲバ闘争が続く。が、昭和四十年はまだ平和だった。

マルクス主義派と共産主義派とは、どう違うのか。当時の私には、わかっていなかった。内ゲバ闘争の頃にも、わかっていなかった。わかったのは、すべてが終わったときだった。

過激なデモで社会を変えることができると考えるのが、共産主義派。デモでは社会を変えることはできないが、デモの中で社会主義をめざす人間を作ることはできる、と考えるのがマルクス主義派。マルクス主義派は基本的に日和見である。それが、共産主義派には我慢ならない。

といって、部外者から見れば、似たようなものである。近親憎悪のような対立なのだ。

私は新聞部の中で孤立してしまった。吉田の新聞部解体路線に乗っかっていたのだ。疎外されるのは当たり前だった。

疲れ果ててしまって……。

学園祭の日。大学は左翼の運動で盛り上がっていた。講演会や映画会、左翼的な催しばかり。革命が来るのだ、と私は錯覚した。

好きだった彼、馬場治と革命運動の中で会える。

母も、自分がほんとうに好きだった人とめぐり合えるのだ。

親の問題。私は、まだ、両親のセックスレスを理解できないでいた。ただ、ただ、母がかわいそうで、幸せにしてやりたかった。

そして、高校生の頃から好きだった彼と、革命の中で再会したかった。治は学生活動家ではなかったのに、私は勝手に彼もいずれ革命運動に参加するものと思い込んでいた。

世の中が変わる！ 人々が愛し合い、理解しあうことで、平和革命がやってくる！ 私と彼を中心に、世界が変わる！

私はうれしくて、ぺちゃくちゃおしゃべりを始めていた。

夜も眠れない。騒いでばかりいる。

両親が、私を田舎に連れて行こうとした。

田舎といっても、当時、私たち家族はすでに新潟を脱出して、首都圏に来ていた。田舎はもうない。帰るところはない。

両親は、そこで、私を母の実家に預けようとした。母の実家。新潟県のはずれの温泉地、瀬波。そこで叔父夫妻が旅館を営んでいた。母が私をそこへ連れていく。

が、都会から田舎に来たとて、治るような病気ではない。結局、私は瀬波の精神病院に入院させられてしまう。

これが、その後、長く続く私の病気の始まりだった。

【三】差別

障害者なら、障害年金をもらえるはずである。が、私が発病したのは学生の時で、まだ国民年金に加入していなかった。発病時に国民年金に未加入では、障害年金はもらえない。だいたい、私の両親は、常識あるような顔をしているが、実は常識がなく、当時始まったばかりの国民年金のことを何も知っていなかったのだ。

「私も障害者なの」と言うと、人は、「ええっ！」と驚く。

「どうして？　なんでそんなことを言うの？」

「病院に通っているもん」

「どこが悪いの？」

「ひ・み・つ」

都会では、精神病院に通っていても、田舎ほど人は問題にしない。でも、できれば、それは秘密にしておきたいではないか。

近くに精神科のクリニックも、心療内科のクリニックもあるが、私はそこは避けている。そんな所に入りにしているのを、近所の人に見られたくない。で、わざと遠くの病院に通っている。

病院で診察を待っていると、人に声をかけられることがある。

「なんでここに来ているんですか？　どこも悪くなさそうなのに」

「薬を飲んでいるから。薬を飲んでいれば、正常なんです」

「ああ、そういうこと……」

あ、私はまずいことを言ったかな、と思う。薬がなければ異常なのか。治らない病気。根本的には治らないから、薬で抑えておく以外ない。私は双極性障害の薬の副作用で、腎臓を悪くした。これも、治らない。その上、腎臓病に効く薬はないそうだ。

病院に行くときは、精神科の薬を飲んでいると、申告しなければならない。それが不満の元でもある。先日、変形性膝関節症のために通っている整形外科で、理学療法士に手が震える理由を聞かれた。

「薬の副作用なんです」

「何の薬？」

「双極性障害という病気がありまして、その精神科の薬で」と言ったら、

「えっ！」と彼女がびっくりした。

あ、またまずいことを言ってしまったかな、と思った。しかし、しょうがない。できれば精神科に通っていることは、人に知られたくないのだが。

文学上はどうか？　小説教室の仲間に、秘密にしておいたら……。それでは小説が書けない。

結局、私はいろいろな場面で、精神科のことを明らかにしていて、近所の人たちには秘密にしている。

何も恥じる理由はない。脳の病気も、身体の他の部分の病気と同じである。

昔、子供の頃、手を左回しして、「クルクルパー」と言って精神障害者たちを馬鹿にしていた。私も無邪気にその差別に加わっていた。何も考えなかった。

病気になってからは、母に差別された。

「私はとっても苦しんだんだ」と母は言う。

「また、お前が病気になって、あの苦しみを感じなければならなくなると思うと、切ないんだ」

「あんな苦しみは二度と味わいたくない」

苦しい、苦しいと、母は言う。しかし、子供の治らない病気で、もっと苦しんでいる親はいるのではないか。たかが双極性障害で、なんでそんなに苦しまねばならないのか。

一度だけそんな母を批判したことがある。

「ママは、自分の差別感で、実際よりよけい苦しんでいるのよ。精神障害者を差別するから、苦しむのよ」と言ったら、母は怒った。

「何を言うの！ よくもそんなことが言えたもんね！」と、怒り狂った。

「ママより苦しんでいる人はいるわ」

「比較にならない！」と母は大声でわめいた。

お前のおかげで苦しい、苦しいと、言われて、私はゆううつだった。うつ病が昂進していた。二度と苦しみたくないなら、娘をうつ病にしなければいい。うつ病にならなければ、躁病に代わることもないのだから。それが母にはわからない。

結局、母とは分かり合えなかった。私が五十歳を過ぎてから、父は脳梗塞で、母はガンで、亡くなった。もう十三回忌も済んだ。すべて過ぎ去ったことである。

(過去 その10) 生涯で一番不幸だった出会い

大学を卒業した私は、小さな旅行社に勤めたが、仕事になじめず、解雇されてしまい、そのショックでまた双極性障害が再発した。

半年間入院治療して、退院後、家庭療養していたとき、母が教師になれと勧めた。

「教師なんて、私は嫌よ。どんな職業に就いてもいいけれど、教師だけは嫌！」

「なんでお前？」

「子供の頃、くだらない教師たちにいじめられたわ。あのときから、私は、一生、教師にだけはなるまいって決心していたの」

「お前の教師たちはみんな、くだらなかつたのかい？」

「そりゃ、良い先生もいたけれど」

「それだったら、お前、自分もそういう良い教師になればいいじゃないか。何にも問題ないじゃないか」

「……」

それもそうだと思った。大学で教職課程はとってあった。

「千葉県の臨時教員採用試験を受けてみないかね？ 臨時試験は合格しやすいんだよ」

母は、新潟県から千葉県に転勤してきて、当時、千葉県立高校の家庭科教師をしていた。で、教育庁の内実にくわしく、コネもあった。

私は試験に合格した。

大学を出た翌年の秋のことである。採用口は二つあった。一つは、千葉市の養護学校の教員、もう一つが船橋市の中学校の口であった。どちらを選ぶか？

ここが運命の分かれ道だったのだが、何しろ私の母は、人を差別する人間である。

「養護学校なんて、大変だよ。障害児たちは、同情なんて受け付けられないからね」

そんなに大変なのかなあ、と思った。大変だったかもしれない。しかし、健常児の教育が大変でないということもなかったのだ。

私は船橋市の中学校を選んだ。

十月一日に来てほしいと言われ、その前に私は教育委員会に呼び出された。

何の用かと思っていくと、要するに日教組対策なのだった。

「あなたは学生時代に左翼運動をしていますね」と教育長が言う。

「今はどうですか？」

「今はしていません」

「日教組をどう思いますか？」

「日教組のことは、わかりません」

「今後、日教組運動などしないと、約束できますか？」

「はい」

「実は、今度あなたの行く中学校はその点で問題があるので、心配しているんです」

「はあ……」

何のことか、さっぱりわからなかった。

A中学校は船橋市教職員組合の拠点校だった。

前衛党が強い。しかし、これは問題でなかった。私は学生の頃から前衛党が嫌いであった。高校生の頃までは父の影響で前衛党を支持していたが、大学に入って核実験反対運動に参加してから、ソ連の核実験を「自衛のため」と言って支持する前衛党は嫌いになったのだ。

不幸だったのは、A中学校の社会科教師、森田勉との出会いであった。

午後五時になって、勤務時間が終わってから、職員室で組合の分会が開かれる。

私は半年間は、組合に入らないつもりであった。半年間、条件付採用という身分なのだ。つまり、いつ首切りされるかわからないという。もちろん、組合に入っただけで首切られることはないだろう。が、マークされることは確実であった。

それでも、五時になれば分会が開かれるので、そこにいれば自然、交流があった。誰がどう発言したかわかる。中年の大男、小林実が、前衛党の演説をする。

分会長の森田が私のそばに来て聞く。

「今の小林氏の発言、どう思います？」

「私、前衛党は嫌いです」

「日教組に反対ですか？」

「いえ、日教組のことはわかりません」

「社会主義党はどうですか？」

「社会主義党は、たいしたことないですね」

「安保のことは、どう思われますか？」

「安保は反対です」

安保というのは、日米安全保障条約のことで、ちょうどこの頃、一九七〇年の安保見直しを控えて、世間が騒がしくなっていた。

数日たって、森田がビラを持って来た。安保反対のデモを呼びかけるビラである。

「私は、共産主義派のデモなんかに行きません！」と、私はそのビラを森田に突っ返した。

「それなら、あなたはいったい何者なんです？」と彼が聞く。私が前衛党は嫌いと言ったので、自分の仲間だと思ったらしい。

「何者って……学生時代はマルクス主義派の活動をしていました」

「ああ、それで」と森田は納得した。

次の日から、彼の、私に対するめちゃくちゃなオルグ活動が始まった。毎日のようにビラや新聞を持ってきて、集会に行こう、デモに行こう、と誘いをかける。断っても断ってもそれが続いた。

これが、後に私が後悔する、生涯で一番不幸だった出会いだった。

学校の授業はうまくいかなかった。最初、私は普通に授業をすれば生徒たちはそれを静かに聴

いてくれるものと思っていた。が、それが当て外れだった。生徒たちは、授業中、教師の話听不懂、ぺちゃくちゃがやがやいらぬおしゃべりばかりする。いったい何をそんなにお互いにしゃべることがあるのか、あきれてしまう。世の中、民主主義だから、教師の権威などない。難しい英語の話など聞くより、お互いにつまらない、どうでもいいおしゃべりをしていた方がずっと楽だ。

生徒が授業に参加してくれない。

「先生はやさしすぎる」と言われた。

「もっと厳しくしなければ」とも言われた。

厳しく、とはどういうことだろう？ 私がいくら生徒を叱っても、怒っても、それは「厳しい」ということにはならないのだった。

若い女性でも、生徒を押さえつける力のある教師もいた。私は性格的に押しが強くなかった。他に対してやわらかいのである。

私の親たちには、娘が中学校教師には向いていないことがわかっていなかった。私と同じく性格的にやわらかい父親は、高校教師で、中学校のことがわかっていなかったし、高校の家庭科教師である母親も、一時は田舎の中学校で数学を教えていたことがあったが、この方は性格的に押しが強く、私とはまるで性格が違っていた。

未熟で、授業法がよくわからない新米教師の私。新米教師に教授法を指導しないベテラン（？）教師たち。

英語主任は、変った教え方をされていて、教科書を一切使わず、日本文を逐一英文に直して復唱させていた。逐一というより、日本文の文法を分解して、たとえば「私は、である、一人の生徒」などと黒板に書いて英語に直させる。すべてその調子である。彼は自分独特の信念があるようだったが、その考えを私に教えてくれるわけでもない。なんだかさっぱりわからなかった。

学年主任は、怒ってばかりいた。「授業を見に行きますよ！」と言って見学に来て、「先生の授業は、授業として成り立っていませんね！」と怒る。どうすればいいのかは、誰も教えてくれない。

勉強したい生徒は、教師を怒る。授業をちゃんと聞きたいのに、回りが騒がしくて、聞きとれない。で、先生が悪いんだ、教え方が悪いんだ、と考える。私はそういう生徒たちに「月給泥棒！」とも非難された。

クラス担任としても、英語が教えられなくて生徒の信頼を得られないので、うまくいかない。私は担任として非難されたり、時には担任を外されたり、散々だった。

「私は教師の仕事だけで精一杯なのよ」と言っても、森田勉は、「あなたみたいに太ってバイタリティーがあったら、両方できるじゃないですか」と言って聞かない。随分ひどいことを言われたものだと思っただが、そのときはあまり感じなかった。背がすらりとしてハンサムな森田に恋し始めていた。

彼を好きになったから引きずられて、一九七〇年の安保闘争に加わって……それがもう半年遅かったら、と後々まで悔やんだ。半年遅かったら、私は共産主義派の闘争には参加しなかっただろう。

半年後、七〇年安保闘争の終わった後、共産主義派とマルクス主義派との殺し合いが始まったのである。内ゲバである。

殺しを始めたのは共産主義派の方であったが、もともと、この両派は暴力で対決を繰り返していたのだ。偶発的な事件が必然的な闘争に変わっていく……。

私は麻薬をかがされていた。

麻薬とは、マルクス主義であり、共産主義派の運動である。麻薬をかがされて、抵抗できなかった。問題の森田勉にはもう彼女がいるとわかったのに。私は批判する力を失っていた。半年遅ければ、まだ批判する力があったのに。

勤務時間が終わると、森田が私を集会に連れて行く。

「日帝のアジア侵略を内乱に転化せよ！」

日帝とは、日本帝国主義の略である。共産主義派は、自分たちが過激なデモをすれば、実際に革命が成就する、と本気で思っていた。

デモのない日は、集まって会議をする。リーダーが参加者たちを、自分たちの考えに従わせる。毎日、毎日、アジテーションばかり。「空気入れ」と称してアジるのだ。(アジるつまり扇動する)

「反革命マルクス主義派を殲滅せよ！」

内乱の時代には、人が死ぬのは当たり前だそうだ。

そして、抑圧された朝鮮人民、中国人民に謝罪しようとする……。

人殺しをしている共産主義派がなぜ抑圧された人民に謝罪しようとするのか、理解に苦しむところだが、彼らは大真面目なのだ。抑圧された人々に連帯したい彼らは、ついに、被差別部落民解放、女性解放、障害者解放などと言い出した。

私はデモや集会に参加し、共産主義派の会議(反戦青年委員会という)にも出た。そして少しでも彼らを良い方に変えたいなどと思ったりした。その一方、連日の活動で、教師としての仕事の方はおざなりになっていた。それは荒れる授業を解決しようとせず、状況にまかせておく月日が長く続いたという結果も招いた。

一九七〇年代は平和な時代であったが、共産主義派に言わせると、「内乱的死闘」の時代なの

だそうであった。自分たちが過激なデモばかりしているから、錯覚してしまうのだ。

障害者解放。その点については、私はあまりにひどい事例を知った。共産主義派は、自分たちの運動で、一人の障害児を生み出したのだ。

高橋徹は、小学校の教師、彼ら名乗るところの「反戦派教師」であった。一九六九年の闘争に参加して、リーダーであったため、逮捕されてしまう。一年間近くも拘留され、起訴され、教職は懲戒免職となった。

彼は同じ活動家の由美子と結婚していた。由美子は、労働組合の事務員だったが、共産主義派の一員として、過激な活動をがんばる女性だった。とにかく彼女はがんばるのだ、と仲間たちは賞賛していた。その彼女だが、夫が逮捕された時、妊娠していた。妊娠しているのに、彼女は日中働くだけでなく、夜はデモや集会に出てがんばった。休むことはなかった。

「君、そんな身体で大丈夫なのかい？」身重の身を見かねたリーダーが聞く。

「大丈夫です。私は、夫を奪還するためにもがんばります」と彼女は明るく答えた。

妊婦の身を痛めつけるような、激しいデモ。休むことのない、連日の活動。昼の勤務も夜の闘争も彼女は休まなかった。

一九七〇年六月、徹は保釈された。拘置所を出た彼は、七〇年安保の激しい闘争を目前にする。「おれたちは、すごいことをしていたんだな」と彼は感嘆する。家では、妻が出産していた。妻が出産すると、官憲は活動家を保釈したりするのだ。これでこの男もおとなしくなるだろう、と考えるらしい。

由美子は男の子を産んだ。夫婦はこの子に勝男と命名した。これで万々歳のはずだったが……

。

懲戒免職になって、失業している彼を、由美子は働いて支え続けた。子供は保育所に預けて。

その頃、活動家のアジト（秘密集会所）で、私は徹に言われた。

「君も、由美子のように、働いて夫を支えられるようにならなければだめだよ。ぼくたちは、そのために結婚するんだから」

徹は経済的に妻に依存し、家事も育児もすべて働く妻に任せて手助けもしなかった。自分は共産主義派の活動に忙しいのだ。

「ぼくは、彼女が活動をやって、彼が家で子供を育ててもいいんだよ、って言ってるんだ」とリーダーは言っていたが。

ところが、勝男は、三月たっても、半年たっても、首がすわらなかった。

この子を病院に連れて行った由美子に、医者は、「脳性マヒだ」と告げる。

歩くことはおろか、はいはいすることもできない赤子。身体だけ大きくなっても、普通の赤子のように健全に成長しない。このままいつまでも保育所に預けておくこともできなかった。保育所は健常児の施設なのだ。

懲戒免職を取り消してほしい、と彼は役所に申し立てる。その審判の時、私は徹の家族と会った。由美子は首のすわらない身体だけ大きな勝男を抱いていた。

「私だって、この子が丈夫でありさえしたら、この子を預けて働きに出れるんですけど……」と彼女は言う。

父親の徹は、再就職もせず、アルバイトさえせず、アジトで電話番などしている。職革（職業的革命家）気取りなのだ。

「どうやって暮しているの？」と彼女に聞いた私。

「家で内職して」

「内職しながら病気の子供の面倒をみて、家計も支えているの？」

「ええ、そうです」

そして、彼女は述懐するのだった。

「私は、女が子供を産むって、どんなに大変なことか、知らなかったんです。考えてもみなくて。それがわかったときにはもう手遅れでした」

妊娠中は身体を大事にして、元気な子を産まねばならない、それがわかっていなかったと言う。由美子は自分の身体を痛めつけて、がんばりすぎたのだ。子供が脳性マヒになったのは、そのせいだったのだろう。同じ活動家の女などは、

「脳性マヒの原因なんて、わかっていない！」と否定したが。

なおも由美子は言う。「うちは、金持ちじゃないんです。金持ちになれる予定もありません。だから、その範囲で、一番良い方法をとってくれってお医者様には言っているんです」

金持ちになる予定はない……。

後で、私はアジトに電話して、徹に言ったことがある。

「高橋さん、あなたはなんで働かないんです？」

「ぼくは働いていますよ」アジトの電話番も「働く」うちか？

「ちゃんと就職して、月給を奥さんに渡していますか？」

「なんでそんなことを聞く？」

「だって、あなたの息子さんは、脳性マヒじゃありませんか。あなたが働けば、奥さんは子供に専念できるじゃありませんか」

徹は、丈夫なんだから、道路工事でも建設工事でもすればいい。

しかし、私の詰問に、徹は怒って、

「忙しいのに、そんな電話かけてくるな！」と電話を切った。

そして、下部の考えをくみとることなく、上部の命令ばかり押し付けてくる革命組織。それを批判すると、

「革命党が下部構成員に命令するのは当然だ！」とどなられる。

「日帝のアジア侵略とか、内乱的死闘とか、そんな現実離れしたことばかり言って、皆を扇動しているだけじゃない」と言うと、

「ぼくたちは、論争はしない。消耗するばかりだ。君はもうここから出て行け！ 二度とぼくたちに近づいてくるな！ 迷惑だ！」

「君は反党分子だ！」

と、拒否された。

私が追放された後も、共産主義派では、なおもマルクス主義派との殺し合いが続いていた。男たちは血を流していた。

組織にいた時、私は、殺しを指示されたことはない。殺されそうになったこともない。それは、ひとえに、私が女だったからだった。

それでも、私は共産主義派に殺されるのではないかと、思って、恐怖におののいた。不安と恐怖で神経を痛めた。そして……双極性障害の再発。

病気になって、入院して、病気休暇の半年を過ぎても仕事に復帰できず、休職扱いになり……復職できなかった。

その頃、私は自分の英語の教え方の未熟さに気づき、訳読式ではなく、英語で自分を表現する自己表現の教授法にめざめていた。やっと教師としての第一歩に来ていた。だが、遅すぎた。

「精神の病気になるような者に教育はできない」と、校長に言われ、退職を強要された。そして、うつ病になりかかっていた私に、そんな校長と戦う力はなく、教育現場に心を残しながら退職するしかなかったのだった。

(過去 その12) 結婚

結婚したかった。両親は、病気だから結婚は難しいと言ったが、病気になったからって、一生、結婚もしないで、できないで、性に苦しみながら生きなければならないのだろうか？

子供がほしい……。しかし、薬を飲みながら子供がもてるだろうか？ 障害児が生まれないだろうか？

子供をかかえて困っている父子家庭の父親なら、私を受け入れてくれるのではないだろうか？……そう思って、中高年の結婚相談所に行った。

最初の見合い相手は、十五歳と十三歳の娘の父親だった。妻は、不倫の末、離婚して去ったという。とても良い感じの男性だった。

「娘たちは、もう、母親のことは、いいかげん嫌になっているんですよ。散々、勝手なことをしていましたからね。もう帰ってきて、家に入れなくて、娘たちがそう言っています」

「私、娘さんたちとうまくやっていけるでしょうか？」

「さあ、それはどうでしょうねえ？ あなたはまだお若い。娘たちと姉妹みたいなものですね」

私はこの人と結婚したいと思ったが、カウンセラーに「あの方は、あなたとはお付き合いできないっておっしゃっています」とやんわり言われた。

「あなたがお気の毒だって。まだお若いのに、年頃のお嬢さんたちのお母さんにするわけにはいかないって」

次の見合い相手は、独身の初婚者だった。彼は、自分は金ならいっぱいある、と言うのだが、身体にちょっとした欠陥があった。

「私、子供を産む自信がないんです。高年齢で、障害児の生まれる確率は高いし……」と言うと、

「ぼくはお金ならいっぱいあるから、障害児でも大丈夫ですよ」などと言う。

私は怖くなった。この話は断ることにした。

三度目に、橋川正造と会った。

正造は、四歳の男の子がいて、妻とは別れていた。子供がまだ生まれて間もなくの頃、妻は不倫に走り、子供を置いて出て行ったという。彼は中小企業の会社に勤める課長だった。持ち家もあって、条件は良かった。

「ぼくの母が子供をみてくれていたんですが、去年、亡くなったんですよ。で、幼稚園の入園金、十万円、まるまる損しました。今は息子を保育所に入れてます」

「そうですか。でも、父子家庭でお子さんを育てるの、たいへんでしょう」

「近所の食堂のおばさんが、子供を預かってれています。保育所の送り迎えなど、ぼくは会社があって、とてもできなくて。で、食堂のおばさんにお金を払っています」

「それはたいへんですね」

「そう。だからぼくはこうして再婚をあせっているわけです」

「私、子供は好きです」

「うちの息子はみんなにかわいがられるんですよ。親ばかと思われるかもしれませんが、かわい

い子なんです」

「そんなかわいい子を置いて、奥様は出て行かれたんですね」

「妻が出て行ってから、妻の母が子供の面倒をみてくれていたんです。もともと共働きで、妻の母が同居していたんですが」

「その方、どうなさったの？」

「ぼくの母が子供の面倒をみてることになって、妻の母は出て行ったんです。育てる人が次々と代わって、息子にはかわいそうでしたが」

「息子さん、お母さんのことを覚えていらっしゃるの？」

「いいえ、生まれてすぐに、妻が出て行ったので、息子は母親のことは何も覚えていません。でも、嘘をつくのはいいことではないから、離婚したんだとは言ってあります」

「かわいそうにね」

「そう、かわいそうな子です。ぼくも、できるだけ家で息子と一緒にいてあげようとしていますが、何しろ会社が忙しくて、なかなか思うようにしてあげられません」

「で、どういう方と再婚したいのですか？」

「家庭的な人と」

「家庭的、ねえ」

私は自信がなかった。

「ずっと専業主婦でいなければダメですか？」

「いや、子供が大きくなったら、働いてもらって結構ですよ。ぼくはそういうことには頓着しないんです。共働きになったら、ぼくも家事を手伝います」

これは嘘めいていた。

お見合いの後、二、三回、彼とデートした。彼はまじめな、やさしい男性だった。でも、私は嘘を言ってはいけないと思った。病気のことは……小出しにして、神経症になったことがあって、と、簡単に告げた。彼は、少し抵抗があるようだったが、大した問題でないと思ったようだった。

「今度、息子と一緒に会いませんか？ 上野動物園にパンダでも見に行きましょう」と彼が言った。

「はい、ありがとうございます」

正造の息子、正一と初めて会った。目のくりくりしたかわいい子だった。公園に柱があると、登ろうとする。

「こらこら、何をするんだ」と正造が止める。止めなくていいのに、好きにさせてあげればいいのに、と思った。

動物園から忍ばずの池におりて、

「ボート！ ねえ、ボート！」と正一がねだる。

「ダメだよ。ボートは人がいっぱい並んで待っているじゃないか」

「じゃ、見てくる」と、正一は走って行って、

「大丈夫だよ。並んでないよ」と言いながら駆けてくる。

「並んでいるじゃないか。ダメだよ、嘘ついちゃ」

ボートは、お預けになった。

それから、私は彼の家に遊びに行ったりした。正一とも仲良しになれた。

秋も深まっていた。

「ぼくには事情があるんです。十二月になると、会社が忙しくて、残業続きになるんです。で、こんな風にだらだら付き合っていられなくなるんです」

「では、どうすれば？」

「ぼくの家に来てくれませんか？ 付き合ったばかりでもうしわけないけれど、十一月になったら、来てほしいんです」

これが彼の求婚の言葉だった。少し、無味乾燥すぎるが。

「わかりました。じゃあ、次の日曜日は、両親と一緒に参ります」

両親はもちろん、賛成だった。三十歳過ぎて縁遠い娘に、秘かに心をいためていたのだ。

私は式も入籍も後回しにして、彼の家に行った。

付き合っている間は、正一はなついてくれるみたいだったが、いざ同居してみると、やはり拒否反応があった。決して母とは呼んでくれない。そして、父親の見ていないところで、私を殴ったり蹴ったりして、「自分の家に帰れ！」と叫ぶ。

午後五時、保育所に迎えに行くと、砂場で他の子たちと遊んでいる。なかなか帰ろうとしない。それでも、無理に連れて帰ると、家までの道々、あそこで遊び、ここで遊び、寄り道ばかりしている。歩いて二十分の道のりが、一時間もかかるのだ。これがこの子の個性かと思った。

あるとき、買い物に連れて行った。スーパーのおもちゃ売り場でごちゃごちゃ遊ぶ。そして「これ、買って」と一万円もするおもちゃをねだる。

「ダメよ、そんな高いもの」

「ううん、買って。買って」

「困ったわねえ、それなら、今度パパがボーナスもらうから、そのとき買ってあげる。今日はダメよ」

「あーん」正一は泣き出した。「買ってくれないんだ、買ってくれないんだ！」と大声でわめき、スーパーの階段で泣き転げる。

「正一ちゃん、なんでそんなわからないことを言うの？ 今はお金がないから買えない、パパがボーナスもらったら買ってあげるって言っているのに、それをわかろうともしないで、お母さんを困らせて。お金がなければ買えないのよ」

「あーん！ あーん！」正一は泣き止まない。

私が折れて、有り金全部はたいてそれを買ってやるまで、泣き止まなかった。

そんな正一だが、私になついてくれるまで、どれくらいかかったらろうか？ 正直、私は覚えていない。いつのまにか、仲の良い親子になっていた。

【四】再び紅葉の里で

照子叔母から手紙が来た。彼女が長い間高校教師をやっただけあって、達筆の、長い手紙である。相続人たちにそれぞれ送るため、コピーしたらしい、長い、気の遠くなるほど長い手紙である。この十年間、認知症になった雪子叔母を自分がどれだけ世話したか、長くこまごまと書いてある。

照子叔母は、黙っていても雪子叔母の遺産の三分の一を相続する権利があるのだ。三分の一では不足なのだろうか？

「もしかしたら、叔母ちゃんは遺産を六人で六等分すると思っているのではないですか？ 叔母ちゃんは三分の一の権利があるのですよ。あと三分の一が私たち三人姉妹でそれぞれ九分の一ずつ、そのあと三分の一が瀬波の二人姉妹で六分の一ずつ、それが法律で定められた正しい分割方法です。

で、叔母ちゃんの寄与分がほしいというのは、三分の一でも不足で、たとえば二分の一とかほしいということですか？」と照子叔母への返信に書いた。

名古屋の姉久子が電話をよこした。照子叔母と久子とはつ一つ一の仲である。

「二分の一って、あんた、何の根拠があって言うの？」

「いえ、別に根拠ってないけれど、そんなものかなと思って」

「照子叔母ちゃんは、ずっと雪子叔母ちゃんの面倒をみてきたのよ。あんたは、何もしないで、ただ権利、権利って言っているだけでしょ」

「私は日本の国の法律通りにしてほしいって言うだけよ」

「照子叔母ちゃんのこれまでの苦勞を考えないの？ 雪子叔母ちゃんの面倒をみて、それが生きがかったでしょって言うのは、こちらの勝手。照子叔母ちゃんのこと考えなさいよ」

「照子叔母ちゃんが雪子叔母ちゃんの世話をしてきたって、それは家族なら当たり前のことじゃない。私がママやパパの面倒をみた、お姉ちゃんがお姑さんの面倒をみたってことと、同じじゃない。家族なら当たり前でしょ」

私は年老いて病気になった父母の介護をして看取った。姉は、糖尿病の姑さんの介護をして、看取った。

「玲子は誰の介護もしていないけれどね」

妹の玲子は、一番得をしている。

「亡くなった人の面倒をみたって言うなら、法律は寄与分も認めているのよ。だから、専門家の弁護士さんにきちんと寄与分も含めて計算してもらいたいの」

「瀬波の紀子ちゃんも、そう言っているんだって。でも、わかっているのかな、弁護士費用って高いのよ。弁護士を頼んだら、その分、瀬波のもらう分も少なくなるってわかって言っているのかな？」

「私は、啓子ちゃんには、弁護士費用はきちんと受け取ってくださいって、手紙に書いたわ」

「あんた、ばかね」

「あのね、お姉ちゃん、雪子叔母ちゃんは億っていうお金を遺したのよ。そんな多額のお金、弁

護士でなければ処理できないわよ。照子叔母ちゃんが自分の采配でやろうとしているから、私はそれは困るって言ったの」

以前、啓子弁護士が発案で、私たちは照子を雪子の成年後見人にした。それは、雪子の死で終わっているはずだが、照子はその延長線上で遺産処理も自分一人でやろうとしたのだ。

あちこちに金をばら撒こうなんて、中央大学に一千万円寄付したいなんて、いくら亡くなった叔父が中央大学出でも、なんでそんな必要があるのか。私の夫の正造も中央大学を出ているが、彼も「中央大学なんて、マンモス企業みたいなものだから、寄付しなくていい」と言っている。

「瀬波の青空旅館が困っているのに、他のところにお金をばら撒くことはないでしょ」

「瀬波はいい加減、止めればいいのよ。あの旅館、いったい何が売りなの？ 景色がいいわけでもなし、料理がおいしいわけでもなし、女将が愛想いいわけでもなし、売り物が何もないじゃない。いい加減で旅館も閉めればいいのよ。瀬波にお金をやっても、どうにもならない。それこそ死に金よ」

「瀬波にお金をやるっていうんじゃなくて、紀子ちゃんの手当だから、遺産を分けるべきだって言っているのよ。紀子ちゃんが自分の権利でもらったお金を青空旅館につぎ込んでも、それは彼女の自由じゃない」

「そうかなあ。私は早く止めた方がいいって思うけれどね」

いとこの紀子は、旅館はやめたくない、続けたい、と言っている。そして紀子の姉世津子も、もらったお金は青空旅館に融資するそうだ。「焼け石に水」と姉は言うけれど、私は紀子に旅館を続けてほしい。病気のとき、青空旅館の叔父夫妻に世話になったので、そう思っている。

「ところで、お姉ちゃん、お墓めぐりに付き合ったの？」

照子叔母が久子とお墓めぐりをしたと言っている。

「ええ、雪子叔母ちゃんのお墓を探しに、あちこちのお寺に参ったわ」

照子叔母は、田舎のお墓から叔父の遺骨を分骨してもらって、叔父夫妻のお墓を新しく建てようとしている。

「分骨はしてもらったのね」

「ええ、それはね。でも、和夫さんたちがあれこれうるさいのよ。お墓も、いろいろ見たけれど、ぱっとしたのってなかなかないのね。体育館のロッカーみたいでね。永代供養ってのも、難しいわね」

「瀬波に加藤夫妻のお墓も建てればいいのに」

「叔父ちゃんを嫁の実家の墓のそばに供養するの？」

「それは誇り高い叔父ちゃんの意味に反する？ いいじゃない、もう叔父ちゃんはとっくに亡くなっているんだし。私はお墓なんてどうでもいいと思うわね。死んでからのことなんて、考えたって」

「お墓にこだわる人もまだ多いのよ」

「そうですか。で、良いお墓、見つかりそう？」

「照子叔母ちゃんが探しているわ」

その照子叔母からの第二便。東京の四谷に良いお墓が見つかったという。で、そこにしようと思うが、どうか。異存があったら、手紙をほしい、とか。

私は返事を書いた。「私は、基本的にお墓のことにはこだわっていないので、異存はありません。でも、和夫さんは何か言ってくるかもしれませんね。そうしたら、啓子ちゃんやその兄さんの徳夫さんに頼んで、仲介してもらい、和夫さんにいくらかお金をあげて、お墓の件、認めてもらったらどうですか？ 私は和夫さんとは一面識もありませんが、彼がいろいろ言うのは、結局、お金がほしくて言うのだらうと思います。叔母ちゃんは、彼とはいろいろあったらしいけれど、これはお金で解決のつくことと思います」

学校の先生をしてきた照子叔母は、世事に疎いところがあるのだ。和夫氏が雪子叔母を加藤家の墓に入れたいと言ってきた時点で、金を払って認めてもらえば良かったのではないか。もともと、叔父が、全財産を妻に譲るという遺言書を書いていなければ、和夫氏にも遺産相続権があったのである。和夫氏はそれが不満なのだ。

啓子弁護士から手紙が来た。

雪子叔母の遺産は、杉並の土地と家が評価額約七千万円、それを含めて約二億三千万円ほどある。で、今までの葬儀費用とこれからの必要経費、そして雪子叔母が世話になった人たちへのお礼金三百万円を差し引いて、法律に基づいて配分する。照子叔母への寄与分は、全体の二割とする。杉並の家と土地は、照子叔母のたつての願いで、彼女のものとして、二割プラス三分の一は照子叔母のものになるので、差額を貯金等から渡す。で、結局、私の取分は、約二千万円強となる。税金その他はここから差し引かれる。これに異存があるかどうか、知らせてほしい、とある。その後、別便で財産目録が送られてきた。照子叔母は、自分の死後はきちんと遺言書を書いておくと言っている。杉並の家と土地とは、「もともと加藤家のものだから」啓子に遺すと言う。

「お金だけもらえるならいいじゃないか。家なんかももらったら、大変だぞ」と夫が言う。私は「異存ありません」と書いて送る。

で、七月の第三日曜日に紅葉の里に集まってほしい、と知らせがあった。実印と印鑑証明書十八通持ってきてほしい、とある。

八王子の紅葉の里まで、電車で三時間はかかる。集合は十一時だから、八時には家を出なければならない。ラッシュの時間にぶつかる。日曜日だから、通勤ラッシュではないだろうが、私は膝が痛いのだ。ふだんなら何でもないことだが、痛む膝をかかえて電車で三時間はつらい。

啓子に電話する。

「私、膝が痛いんですけれど」

「紅葉の里まで来られませんか？」

「ええ、ちょっと……」

「でしたら、皆さんに書類をいただいたら、その後、私がそちらにお伺いします。お宅にお伺いしてもいいし、お近くでお会いしてもいいです」

「それは申しわけないですから……」

「いえ、いいですよ。皆さんのお宅を訪問するのは大変ですが、ゆり子さんだけなら」

「そうですか。じゃあ、できるだけ紅葉の里に行くようにします」

八王子ではなく、東京駅か新宿あたりにしてほしかった。が、高齢の照子叔母に負担をかけないようにしたのだろう。

夫が言った。「正一に車を運転させて行けばいいだろう」

「車で？」

「そう。八王子なら、首都高速で行けば早いよ。電車でぐるぐる廻るより、一本で行けるよ。おれの車には、カーナビがついているし」

「あなたは行ってくれないの？」

「おれは、知らないところに行くのは苦手なんだ。正一なら運転手だから、慣れているだろう。日曜日だし、正一を使えばいい」

「カーナビが付いているのに」

「カーナビに従って運転するのも、たいへんなんだ。おれは、ゴルフ場に行くときはカーナビで行くけれど」

正一に言ったら、行ってくれると言う。

区役所まで夫に送ってもらい、印鑑証明書をもらう。必要な戸籍謄本などは、弁護士さんがそろえてくれると言う。

十八通ももらうのは大変かなと思ったが、一通も十八通も手間は同じなのだった。あっと言う間に出てきた。

しかし、台風が来た。速度の遅い、非常に大型の台風が、西日本を襲って、大雨を降らせている。日曜日には、関東にも来るといふ。台風の日、皆、それぞれ、八王子へ行けるだろうか。大雨洪水警報など出ているのに。

名古屋の久子姉に電話する。

「台風ねえ。私は台風に沿って上京するからいいかな。瀬波の人たちは、台風に向って来るわけね」

「首都圏はどうなるのかしら？」

「さあねえ」

啓子弁護士に電話すると、

「交通網が寸断されると、困りますね。土曜日の夜、私が皆さんに電話します」とのこと。

台風は関東を避けて通った。

土曜日の夜、彼女から電話。

「大丈夫そうですので、予定通り、皆さんに集まさせていただきます」

「はい、私は息子に運転させて車で行きますから」

膝はまだ痛い、車なら大丈夫だろう。

翌朝、近所に住んでいる息子に運転させて車で八王子へ向う。首都高速が渋滞していた。

「お前も紅葉の里で、おばさんたちと昼食を食べる？」

「おれ、いいよ」

「そう。それなら駅の近くで時間をつぶして、二時頃迎えに来てね。ここにお小遣いあるから」
正一に一万円渡す。

「紅葉の里で何をやるの？」

「亡くなった叔母さんの遺産を分けるの。印鑑を捺して、署名するの」

「えっ？ 帰りはお金を持って帰るの？」

「いいえ、現金を持って帰るわけではないの。泥棒が来たって、盗まれる現金はないから、大丈夫」

「泥棒が来たって、おれがお金、渡さないよ」

正一はげんきんな子なのだ。

ちょうど十一時に紅葉の里に着いた。もう皆、そろって来ていた。

照子叔母の部屋は狭いので、一階の応接室を借りてあった。

「じゃあ、皆さん、おそろいになりましたので、始めさせていただきます」と啓子が始める。

「ここにあります資料のように、これまでの葬儀費用などこれから必要経費、雪子叔母さんのお世話になった方たちへのお礼などを差し引いて、この前、お手紙でお知らせしました通りに、遺産を分割したいと思います。で、財産目録にありますように、若干の外貨と株式がありますが、これをほしい方、いらっしゃいますか？ いらっしゃらないなら、この分は照子叔母さんに相続してもらおうと思います」

今、外貨も株式も値下がりしている。

「いらっしゃいませんね。では、この分は照子叔母さんのものにして、現在、外貨も株式も値下がりしていますから、この分は除外して、それぞれの取分を計算してもよろしいでしょうか？ そうしたら、計算しやすくなるんですが。それともこの分も照子叔母さんの取分に含めて、全体で計算した方がよろしいでしょうか？ 後で不満の残らないよう、皆さんのお考えを聞かせてください」

私は自分の取分を多くしたい。

「外貨や株式が値下がりしていたって、将来値上がるかもしれないし、いずれにしろゼロになることはないでしょう？ だから、それもふくめて、計算してほしいと思いますが」と言ったが、私だけで、誰も発言しない。皆、いい子ぶっている。一番お金のほしいはずの紀子も、

「私は、旅館が困っているので、お金が入るのは、ただ、ただ、ありがたくて」などと言う。

弁護士が結論を出した。

「そうですか。だったら、一人でも異議があるので、これらも含めて計算することにしましょう。で、ここに、遺産分割協議書を作成してきましたので、それぞれ署名捺印をお願いします」

遺産分割協議書に署名捺印して、それぞれの銀行等へ提出する書類にも署名捺印する。雪子の銀行預金が各銀行約一千万円ずつになっているので、書類も多かった。銀行が仮に倒産しても、一千万円までは保証されるのだ。

お昼なので、うな重を食べて、

「では、私は用がありますので、これで失礼します」と啓子は帰ろうとする。

「ちょっと待って。今、アイスクリームが来るから」と照子は止めたが、忙しい啓子は帰った。やり手の弁護士は、用も多いのだ。

アイスクリームが一つ余った。もったいない。

「じゃあ、息子呼びますね」と私は息子の携帯電話に電話する。

「アイスクリームあるから、おいで」

どこにいたのか、息子はすぐに来た。

照子叔母が、問題のお墓のことを説明する。やはり、和夫氏からクレームが来たとか。田舎のお墓の維持費、長い間、自分が払ってきたというので、それらをまとめて啓子の兄に仲介してもらい、五十万円支払ったという。

「そしたら、和夫氏の娘から感謝の電話が来て、まあ、あの人たちに感謝してもらったのは初めてだったけれど」

そうだ。和夫氏はやはりお金がほしかったのだ。

この後も照子はいろいろ話していたが、私は正一を待たせているので、早々にことわって帰った。

橋川正造の家は、埼玉県にあったが、結婚して半年後、私たちは一家で千葉市の私の両親の近くに引っ越した。

「面倒をみてやるから、みんなでおいで」と母が言って、両親の住む団地の中の別の部屋を買ってくれたのだ。私が教師をやめた時にもらった退職金、それに共済年金の脱退一時金も、つかった。お金があって良かったと思ったが、脱退一時金などもらわなければ将来の年金になったのに、と、後で後悔した。

ともあれ、私たちは親のそば、スープの冷めない距離に住むことになった。夫も、「ぼくは気にしないよ」と快く賛成してくれた。

母のそばに来たので、正一の面倒はみてもらえた。正一はすぐ近くの幼稚園年長組に入る。翌年は小学校に入った。

母はすでに定年退職していた。千葉県の公立高校を退職して、市内の私立保育学院に就職したが、そこも退職していた。保育学院というのは、保母と幼稚園教諭の養成所である。この時は、まだ保育士とは言わず、保母と言っていた。保母といえば女性ばかりで、男性の職業としては認知されていなかったのだ。その上、仕事の好きな母は、団地の子供たちに数学を教えていた。昔、田舎で、中学生に数学を教えていたのである。

母は正一にも算数を教えてくれたが……正一はなかなか計算ができないのだった。

「この子は、記憶力も理解力も弱いね」と母は言っていた。

それでも、友だちと仲良く遊ぶ子で、明るい、元気な子だった。学校の成績は良くなかったが、生活力はあるのだった。父も、正一に一日三百円の割りでお小遣いをあげてくれた。

両親は、ずっと共働きしてきたので、二人の年金で、豊かに暮せた。年金といえば、父は自分の年金をほとんど酒代につかっていた。

のろまの父は、電話などなかなかできないのだ。自分の好きな姉弟にも電話できないのに、酒屋にだけは電話できる。毎日のように近くの酒屋に電話して、高級酒を注文していた。酒なら、日本酒の他、ビールもウィスキーもワインも焼酎も飲む。毎朝、起きると酒を飲み、昼食後にも酒を飲み、夕方にも酒を飲み、夜寝る前にも酒を飲み、深夜に起きて酒を飲む。酒びたりだったので、病気になったのだろう。

正一が小学校三年生になった時から、私は外で働き始めていた。教材会社に勤め、その後、塾に勤め、母に随分助けてもらった。

塾の後、簿記の資格をとって、団地の管理組合の事務員の仕事をした。これは簡単な仕事で、皆の財産を管理することで、やりがいもあった。その仕事をして三年ほどたって、突然、父が倒れた。

突然といっても、その時私が予期していなかっただけで、突然ではなかったのだ。父は近くの診療所に通っていたが、めまいがするというので病院で検査をしてもらい、脳梗塞の跡が見つかった。以前、新潟の親戚に一人で会いに行ったとき、帰りの新幹線の中で意識を失ったことがあったという。しばらくして意識も戻ったので、そのときはなんとも思わなかったのだが、そ

れが一過性脳虚血発作であつたらしい。あるいは、すでに軽い脳梗塞であつたのか。いずれにしろ、脳に梗塞の跡があるので、薬を飲まなければならないと言われた。

父は薬を飲まなかった。

私が父の許に行くと、薬の袋がいっぱいあるのを見せ、

「ほら、診療所はこんなに薬をいっぱいくれるんだよ」と言う。

父は診療所に行くだけで、薬を飲まずにためておいた。ある日、発作が起きた。

朝、私が管理組合に出勤しようとして準備していたら、突然母から電話がかかってきた。

「パパが倒れたんだよ」

「そう？　じゃあ、今すぐ行きます」

管理組合に今日は欠席しますと電話をいれ、父母の家に向つた。

父はトイレで倒れていた。便を出そうと力んで、倒れたのだろう。母の力では父を動かせない。私にもできない。

すぐ救急車を呼んだ。

かかりつけの病院に連絡して、そこへ救急車で運んでもらう。私が救急車に同乗した。父は脳梗塞の発作が起きたのだった。しばらく入院する。

この当時、まだ公的介護保険は誕生していない。ホームヘルパー派遣も、デイサービスやショートステイも、公の措置として受けなければならなかった。

父が入院して三ヵ月、退院の前に母と話し合った。

「私は年をとって、身体が言うことをきかなくて。こんなになるなんて思いもしなかったんだけど」

母はもう八十代。老々介護になるのだった。

「いいわよ、ママには私がついているじゃない」

私は仕事を辞めることを決心した。別に嫌々辞めたわけではない。管理組合の仕事は他にやる人がいるだろう。でも、父の介護は、私しかやれない。母は高齢だし、姉は遠く離れた名古屋におり、妹は電車で一時間くらいのところにいるが、音楽評論家つまり音楽関係のフリーライターという仕事をしている。私が一番身軽なのだった。妹には思いっきり仕事をさせてやりたかった。

外での仕事を辞めて、家庭で親の介護をする……そのときは当然の選択と思えたが。私はやはり後に後悔することになる。社会と切り離されて家庭にこもる……それがどういうことか、子育ての時に家庭にいて、疎外感を味わっていたのに、私には今一つわかっていなかった。

学校を出て、ちょっとだけ働いて、家庭に入り子育てし、またちょっとだけ働いて、再び家庭で親の介護をする。そして年をとっていく……現代の一般的な女の一生。社会的には不完全燃焼だった。

しかし、父の退院の前にやっておくことがあった。

父のベッドを介護用ベッドに代える。父は前からダブルベッドに一人で寝ていて、ダブルベッドなのに、深夜にベッドから転げ落ちて「わああ！」と大声を出すのだった。介護用ベッドには手すりが付いているから、落ちないだろう。高さも自由に調節できる。ベッドの片方を上げて、

上半身を起こすこともできる。介護用ベッドは市の補助を得ることができた。

母と私は、父のもともとのダブルベッドを業者に引き取ってもらった。しかし、介護用ベッドはこれよりもっと大きいのだ。これを置くスペースを部屋にとらなければならない。

「しかたないわね。パパの机を棄てましょう」

父愛用の机も業者に引き取ってもらう。机の引き出しの中には、つまらないものがいっぱい入っていた。これらも棄てる。

元気なとき、父はこの机に向って、数学の大学受験問題を解いていた。これが、彼の趣味だった。でも、近年はその元気もなく、もっぱら机に向って酒を飲んでいて、酒飲みに使っていたのだから、机ももう不要なはずだった。退院してから、父は、「机、机」とぶつぶつ言うようになったが。

父は退院したが、その後も、何度か発作を起こした。母がいてくれたから、助かったが。入浴のときとか、トイレのときとか、よく発作を起こした。そのたびに入院騒ぎになった。脳梗塞の発作だけでなく、無理をして骨折もした。また、整形外科に入院する。

この頃、父はまだ歩いてトイレに行くことはできた。で、排泄の介助をしなくていいので、母も私も助かっていた。しかしそれでも、何度も入院して、そのたびに身体の機能が弱って、自立して排泄ができなくなった。病院ではトイレに連れて行ってくれず、紙おむつをあてる。紙おむつの期間が長くなると、自立して排泄ができなくなる。もちろん、病院にはリハビリのプログラムもあるのだが、父はつらいリハビリを嫌がった。退院してから、外に出るときは、車椅子に乗せたが、父は自分で車椅子を動かそうとはしなかった。

「年だからね」と母が言う。

「皆、身体が不自由になっても、リハビリしたり、車椅子を動かしたりしているのに」と私が言うと、母が父をかばう。

「そういう人たちは、身体が不自由でも、若いんだよ。パパはもう年寄りで、年齢も九十歳近いんだから、無理なんだよ」

しかし、母は自分ももう年寄りなので、とても父の介護はできないと言う。そして私では頼りにならないらしく、父を病院に入れることばかり考え、病院でだめなときは特別養護老人ホームに入れることを考えた。これは、父がとても嫌がった。市の職員の人も、「本人の意思に反して無理に入れるってことはできませんよ」と言った。特別養護老人ホームは何十人も順番待ちということだったが、父の場合は、本人が嫌がるので、申し込むこともできないのだった。

これがダメとなると、母は今度は父を老人病院に入れようとした。それを調べてみると、費用がとてもかかるという。父の年金ではとてもまかないきれない。

「その費用に、子供たちからお金をとろうと思うんです」と母は知り合いに言っていた。

私がいるのに、母は父をそんなところへ預けることばかり考える。しかし、母自身も病気になっていた。父が倒れる前に、乳がんの手術をし、その数年後には肺がんの手術もしなければならなかったのだ。

だが、父は特別養護老人ホームにも老人病院にも行くことはなかった。

何度も発作をおこして、その度に、一般の病院に入院させたのだが……入院中に肺炎をおこ

した。

その日、私は病院の父のそばに付き添っていた。父はこんこんと眠り続けていた。心電図計がそばに置かれている。その心電図が波を打たず、平らになる……これって、どういうことだろう？などと私は不思議に思っていた。

病室に看護師が入ってきた。

「呼吸をしていない！」

「えっ？」

看護師は先生を呼びに行った。

そして先生は、父の上にまたがって、心臓マッサージをしてくれた……心電図が激しく上下する。

「お家の方を呼んでください」と看護師に要求された。で、あわてて母と姉妹に電話する。

実家に来ていた姉が、母を連れてきてくれた。

先生はまだ心臓マッサージを続けていたが、

「ありがとうございました。もう結構です」と姉が言った。

「おじいちゃん、もう苦しいことは何にもありませんよ」と、母が父の肩をなでさすりながら、言った。

そして、葬送の時が来て、過ぎた。

ついで母のがんが再発する。

母は父に言っていた。「介護している者も倒れて、共倒れになってしまう、それが一番悪いことなんですよ」

夫婦共倒れになってしまったら……それが一番良いことのようにも思えるが、母は父が亡くなっても自分はなおも生きたいのだった。

その思いもむなしく、がんが再発した。またも肺がんである。

私も子宮がんの手術をしなければならなかった。母の面倒をみている最中だったのに。親子でがんになって、なんとか乗り切るしかなかった。

母は病院で亡くなった。

両親が亡くなって、私の介護は終わった。夫の両親は、もう私たちの結婚前に亡くなっている。私は晴れて自由の身になったのだ。

夫が定年退職する。

私も、気がついてみれば、もう五十代後半であった。労働年齢を過ぎていた。

社会に出て働きたいと思ってきた人生だったが、もうどこも雇ってくれない。それが現実だった。

【五】納骨の日とその後

「あなたはいとこの弁護士に会って、ああ、彼女と自分は違っていた、専業主婦になった自分は流されてきた、と思ったようですが、弁護士も流されてきたのです。なぜ家庭内の仕事と社会での仕事に、優劣をつけるのですか。家庭内での仕事も立派ではありませんか。あなたは、お金をもらえる仕事が上だと思っているのでしょうか」

これは、私のカルチャーセンターの小説教室の指導者の言葉である。

先生は何もわかっていない。優劣とか、お金とか、そんな問題ではないのだ。

以前、女性も男性と同じく生産活動にたずさわっていて、社会的労働をしていた。それが、資本主義社会になり、いわゆるサラリーマンといわれる人々が多くなって、サラリーマンの妻たちは専業主婦となった。男性は外、女性は家庭内、という分業が成立した。そして社会的労働から切り離された妻たちの疎外が始まったのだ。

実はこれは一時的現象に過ぎない。電化製品の普及その他で、家事労働の社会化が進み、女性の社会進出も進む。共働きも一般化する。子供たちの保育所が充実すれば、子育ても社会的労働と両立するようになるだろう。老人介護も、介護の社会化とともに、女性の犠牲的労働ではなくなるだろう。将来の社会では専業主婦は少なくなり、外で働きたい女性はみな、働けるようになるだろう。現在とて、家事労働のうち、どうしても人間の手でやるしかないのは、掃除くらいなものである。

現代の女の一生は、社会ではちょっとしか働けない不完全燃焼である。不完全燃焼の疎外感を、家事も大事だとか、お金だけではないとか言っても、何も解決しない。男の人たちには、この疎外感はわからないのかもしれないが。

子育てしていたとき、私はむなしい気持ちに襲われ、自分でもこの気持ちをどうしていいかわからず、友人たちに愚痴ばかりこぼしていた。このむなしい気持は、外へ出て働くことによってしか解決できないものだった。

私の母にはわかっていなかった。ずっと共働きしてきた母は、専業主婦がうらやましく、「専業主婦は資本主義の華だ」と言っていた。せっかく得たこの華を手離そうとする娘の気持ちがわかっていなかった。だいたい、家にいると、暇でしょうがないではないか。

父母が亡くなり、面倒をみてやる人がいなくなった私は、カルチャーセンターに通って、小説創作の勉強を始めた。

小説を書くのは、長い間の夢だった。長い間、書きたい、書きたい、と思って書けなかった。それがようやく機が熟して、書けるようになった。が、それで世に出るといえるのは.....これは難しい。司法試験よりも難関である。

私は図書館に通って、多くの作家たちの作品を次々と借りて読み、がっくりきた。作家たちの文章のうまさ、きれいさ、それに比べて自分の文章の下手さ加減。もう絶望である。私は作家にはなれないのだ.....

小さい頃から私には死の恐怖があった。死ねばすべてがなくなる。自分というものが全くなる。魂の不滅などは、信じられない。自分がなくなるのが、怖い.....。私は一人息子は育てた

けれど、自分の産んだ子ではないから、私のDNAは遺らない。せめて作品を遺したい。

一作でもいいから、後世に遺る作品を書きたい。

それが古典として遺ったら、それで満足して人生を終わろう。どうあがいても、人生の終わりは来るのだから。

古典として遺るといっても、それは永久のものではない。悠久の時の流れの中では、やがて消えていくものである。極端なことを言えば、人類自体が不滅ではなく、やがて滅亡するものなのだから。

それでも私は、自分の人生を終える前に、作品を遺したい。自分の執念のようなものである。それができないとなると、そこには絶望しかない。

雪子叔母は、何を思って死んでいったのだろうか？ 認知症になったから、何も思わなかったのだろうか？

子供がほしくて、子供に恵まれなかった叔母は、何を遺したのだろうか？ 私たちに莫大な財産を遺してくれた。それだけだったのだろうか？

お正月に亡くなって、お墓の問題で紛糾していたため、十月末にやっと納骨の日が来た。照子叔母が見つめてきたお墓は、東京は四谷の長健寺にあった。私は夫と出かけていった。

JR四谷駅についたが、どの方角に行けば四谷三丁目に行ってくれるタクシーが拾えるのかわからない。東京の街は大賑わいで、どこがどこかわからない。駅前の交番に聞いて、その方角に行く。

タクシーは拾えたが、運転手は長健寺といってもわからないと言う。照子叔母からもらった地図を見せる。地図には地下鉄四谷三丁目駅からの道順しかない。が、運転手はわかったようだった。

しばらく行って、「そこのお寺ですよ」と降ろされた。

「あ、違うお寺じゃない」

違うお寺の墓場がある。

「どれどれ、地図をよく見せて」と夫が言って、「あ、こっちだ」とわかる。少し行くと、長健寺の山門があった。地下へ降りていく道がある。降りていくと、受付があった。

「加藤雪子の法事に来たんですが」

「そこをまっすぐに行って、階段を上がってください。もう皆さん、いらしていますよ」

階段のところで、靴を脱ぐ。みな、黒い靴ばかりだ。私は礼服では来たが、靴は足が痛いので、茶のスニーカーをはいて来た。少し、はずかしい。

照子叔母たちは、もう来ていた。ちらほらと、数人。

「こんにちは、叔母ちゃん」

「ああ、よく来てくれたね」

開式までまだ三十分も時間がある。

「お茶を飲んでいて」

ポットからお茶を注ぐ。長健寺お手製のお菓子もあった。

次々と親戚の人たちがやって来る。親戚といっても、雪子叔母のいとこの子供たちとその家族とか、叔父の姉の子供たちとか、私の知らない人たちが多し。

その中で、啓子がそばに来る。

「来週になったら、最後のお手紙をさしあげますから」と言う。

「そうですか。もう相続税の支払いは終わったんですね」

数日前、税理士の作った相続税の書類が送られてきていた。私も百万円以上、相続税を支払うことになっていた。

「ええ。もう無事済みまし。あと、皆さんにそれぞれお送りするよう、計算しましたが、それでいいかどうか、ご異存がないかどうか、お聞きして」

「はい」

今日は雪子叔母と、そのずっと前に亡くなった夫である叔父の納骨式、そして雪子の一周忌なのだ。叔父のお骨は、田舎のお墓から分骨してもらってある。照子叔母は、どうしても雪子とその夫を同じ墓に埋葬したかったのだ。

「では、皆さん、式の用意ができましたので、おいでください」と僧侶が呼びに来る。

立派なお堂で、読経が始まる。お経の本も渡されて、一緒に読むところも指示される。一緒に読んで、声を出しながら息をするのが大変だったので、僧侶の修行もこれが大変なんだなと思った。

そして納骨。

納骨堂は、広い部屋で、小さな戒名を書いた位牌が並んでいる。戒名が赤で書かれているのは、まだ生存している人の位牌であろう。それが多かった。

叔父と叔母の位牌を並べ、二人のお骨を下に入れる。僧侶は小さな箱を、見せて、「お骨は後でここに入れて、こちらの位牌の裏に置きます。ですから、お参りに来て、下を空けてみて、骨壺がないと思われても、こちらの箱の方に入っていますから、ご心配なく」

子供のない叔母たちは、ここで永代供養してもらうのだ。

お骨もいずれは処分されるのだろう。

法事の宴は、遠縁に紹介された青山の料亭に行くことになっている、と聞いていたのに、このお寺の中で宴席が設けられるらしい。私はちょっとまごついた。

「料亭の都合で、断られたんだって」と妹の玲子が言う。

懐石料理が出てきた。豆腐や魚もある。

「精進料理でも、魚はいいんだって。肉がなければいいんだって」と玲子が言う。

私たちは、玲子とその夫、姪の真理子と一緒に席に座っていた。姉久子とその家族とは離れていた。後は、面識のない人たちが多し。

義弟は、ビールではものたりないらしく、日本酒や焼酎を飲む。彼は酒好きなのだ。

「アルコール中毒にならない方がいいですよ」と、私は、家でアルコール中毒者の本を読んだばかりなので、いらぬことを言う。

「いやー、そうはいかないですねえ」と、義弟。

「真理子ちゃんは、もうすっかり、一人前のOLですね」

妹の子、真理子とは、久しぶりに会った。

「もう二十六歳？ 結婚は？」

「まだあせていないんですよ」と義弟。

「だって、三十五歳までに子供を産まない」と

「まあね」

義弟は、一人娘を嫁に出したくないらしい。

宴もそろそろ終わりで、照子が引き出物を持って来た。ここの費用一切は、雪子の遺産から必要経費として出すということで、私たちはご仏前も持ってこなかった。

「では、皆様、本日は遠いところをご足労いただき、まことにありがとうございました。あと、来年は雪子の三回忌ですので、またよろしく願いいたします」

照子叔母の口上を聞いて、私たちは外に出る。またタクシーを拾うのが一仕事だった。どの方向に行けば四谷駅になるのか、なかなか見当がつかず、交差点のどの道へ行ってタクシーを拾えば良いのか、わからなかったのだ。

やっとタクシーに乗る。

四谷から錦糸町に出て、総武線の快速で千葉まで帰る。

「弁護士さんって、君が啓子ちゃん、啓子ちゃんって言うから、若い人かと思ったのに、もう年じゃないか」と夫が言う。

啓子は白髪交じりだった。

「昔の呼び方が出ちゃってね。啓子さんも、私より三歳若いだけなのよ」

学生の頃は、私も雪子の家に入入りして、啓子とも会っていた。

それから十日ほどたって、弁護士の啓子から封書が来た。分厚い書類にそれぞれの取分が書かれている。相続税、税理士費用、その他の諸経費を差し引いて、私の取分は千八百万円ほどになる。啓子は弁護士費用は少なく取ってくれた。

異存がないなら、振込先を書いてほしいとあったので、私は「一千万はS銀行の口座に、あと残額はM銀行の口座に入れてください」と書いて送る。

数日後、S銀行から電話があった。私の口座に一千万円振り込まれたという。M銀行にも電話すると、やはり振り込まれているという。その由、照子叔母からも葉書があった。

S銀行に行くと、なにしろ多額のお金を振り込んだので、銀行員がていねいに対応する。コピーまで出してくれた。

しかし、銀行の窓口はうるさいのだ。前々からわかっていたことだが、今は金利が安いからと言ってハイリスク・ハイリターンの商品を勧める。私は定期預金にしてほしいのに。

「増やそうと思っているんじゃないんです。元本を割らなければいいんです。銀行が倒産しても、一千万円までは保証されるんでしょ」

「近いうちにお使いのご資金ですか？」

「いえ、そうじゃないですけど。私が有料老人ホームに行きたくなったら、その時つかうんです。いつになるかはわかりませんが」

「ご相続されたご資金ですか？」

「そうです」

「それでしたら、こういうのがあります」

相続によって得たお金なら、三ヵ月間だけだが、良い金利で定期にしてくれると言う。そのためには遺産分割協議書とかが必要になるが。

「あ、それは家にありますけれど、今日は持って来なかったんですが」

「三ヵ月で二万円ほどの利子になりますよ」

「じゃあ、また持ってきます」

数日後に遺産分割協議書を持って行くと、またまた、ハイリスクを勧められる。イギリスの銀行の債券を買うと、三年間、良い利息がもらえると言う。

「だって元本割れしたら困るんです」

「この銀行の格付けはうちよりずっと上なんですよ。格付けってご存知ですか？」

それは知っているが、格付けなんていつ変わるかわからないではないか。

銀行員は、格付けの表を見せて、そこの銀行の有利さを説明する。

「外国の銀行なんて嫌です」

外国の銀行のことまで、なかなか情報が入ってこないではないか。

とにかく、がんばって相続の定期預金にしてもらおう。

M銀行にも行った。ここでもやはり、ハイリスク・ハイリターンを勧められる。

「ハイリスクではございません」と言って保険など勧めるのだ。これだから銀行の窓口は好きでない。

いずれにしろ、がんばって、もらったお金はすべて安全な定期預金にした。

姉の久子から電話があった。

「私はマイナスにならなければいいんだけど」と久子は言う。

「マイナスってどういうこと？ 雪子叔母ちゃんには借金なんかなかったじゃない」

「そういうことじゃなくて……一時所得ってことになるのかしら？」

「あ、所得税のこと？ それなら、お姉ちゃんはまだ相続税を払ったんだから、所得税は払わなくていいのよ。家でももらって、その家を売ったというんなら、話は別だけれどね」

「あ、そうなの」

「私はS銀行に一千万、残額はM銀行に振り込んでもらったわ」

「ああ、そういう手があったのね。私は地方銀行くらいしか口座がなくて」

「地方銀行でもいいけれど、一つの銀行には一千万しか入れておかない方がいいのよ。銀行だって大企業だって、今は何があるかわからないんだから」

「支店が違っててもダメ？」

「支店が違ってても同じ銀行ならダメね。他の銀行口座を作らなくっちゃ」

「ふーん」

「でも、お姉ちゃん、お姉ちゃんなんかももらったお金を毎日の生活にだらだらつかって、なくしちゃうんじゃない？ ダメよ、生活費につかっちゃ。ぜいたくをするっていうんなら、また話

は違うけれどね」

以前、母が亡くなったとき、母の遺産を姉、私、妹の三人で三百万円ずつ分けたのだが、姉はそのお金を生活費につかってしまい、なくしたのだ。姉は生活に困っているのではない。夫から生活費をもらえばいいのに、それをしないで、自分のお金を出してしまうのだ。だいたい生活費を計画的につかうことをしないので、夫から毎月もらうお金では足りなくなり、追加分を夫に請求しづらくなってしまふのだ。

「でも、あの世へは持っていけないよ」

「それはそうだけれどね、いつ、病気になるか、また老人ホームに行きたくなるか、わからないじゃない。自分名義のお金は、いざという時のためにとっておくの。そうすると、普通、結局子供に遺すことになるんだけど、子供に遺したっていいじゃない。いつも余分のお金があったら、豊かに暮せるわ」

父は宵越しの金は持たない主義の人だった。ある金は全部つかってしまう。葬式の費用など遺すのはばからしいと言っていた。で、父の亡くなったとき、わずかな年金の残高しか遺っていなかった。姉は、父親似なのである。

私の通っているカルチャーセンターの小説教室で、同人誌を出すことになった。私も自分のを載せた。精神病院の内部を書いた「白い壁」という小説である。

同人誌ができてきたので、友人たちに送った。すると、前に一緒にエッセイの勉強をしていた白川里子が、すぐに電話をくれた。

「同人誌、送ってくれてありがとう。読みましたよ、あなたの。随分読み応えのある作品ね」

「読み応えのある？」

「そう。久しぶりにお会いしたいわね」

「五月に書道の展覧会があるでしょ」

「それが今年は東日本大震災で開けなくて、来年もだめらしいの。みな、年をとっちゃって」

里子は前衛書道のグループに属していて、毎年五月に日本橋で展覧会を開いていて、私はいつもそれに行き、里子と会っていたのだ。

「そう。それは残念ね。いつも七夕みたいに、一年に一度は会えていたのにね」

「で、お会いしたいのよ。いつがいい？ 明日でいい？」

「ええ、私、明日は暇だから」

「そう？ 東京駅でいいかな？ 東京駅だと私は一本なんだけれど」

「東京駅ねえ……東京駅は広すぎるわね」

「じゃ、お茶の水でどう？」

「お茶の水ならいいけれど。あなたのところって、どこが最寄り駅なの？」

「青梅線の沿線なの。直通が一時間に二本しかないのよ」

「まあ、随分不便ね」

青梅線なら中央線に乗り入れているだろう。私の方は総武線から中央線まで一本で続いている。十一時三十分に会う約束をした。

ほんとに会えるかなあと心配したが、私がお茶ノ水駅の出口できょろきょろしていると、彼女が肩をたたいた。すぐに出会えてよかった。

一緒にスパゲッティを食べ、喫茶店で話す。

彼女は前衛書道の他、エッセイも書き、長い間、家庭教師をしてきた。息子さんに学習障害があり、その子に学科を教える技術を磨き、その技術を生かして子供たちに学科を教えてきたのである。彼女は、現在、もう七十歳過ぎだが、自営業のご主人の手伝いをしている。

「私は死が恐ろしくて、死ぬ前に作品を遺したいの。後世に遺るものを書きたいの。それだって永久のものでないのはわかっているけれど」と私が言うと、

「私は遺したくないわね」と彼女は言う。

「それは、お子さんがいるからじゃない？」

「違う」

「そう……」

現役の事務員である彼女には、私のような不完全燃焼はないのだろう。

「いいわねえ、年をとってもできる仕事があって」

学習障害の息子さんも、東北大学を出て、自立し、結婚もしている。

「うち、主人が、アスペルガー症候群なのよね」

「まあ」

「孫もそうなの」

「へええ、でも、アスペルガーって、芸術的才能があるんじゃない？」

「そうなのよ。主人も、陶芸家だし。仕事は仕事で、別だけれど」

どこのうちにも、いろいろあるんだなあとと思う。

二時間ほど話して別れた。

帰りの電車の中で、私は思った。自分に才能がないとか、ぐずぐず思ってもしょうがない。書きたいなら、これから書き続けていこう。人生の最後の火を燃やそう。私が生きたあかしを、遺せるよう、がんばっていこう。

流されてきた人生だけれど、いつも、そのときどきで、精一杯生きてきたのだ。これからもそれを続けていこう。

【六】 三回忌

一年たった。

九月、照子叔母から、雪子叔母の三回忌の案内状が届いた。長健寺で十月十三日に法要を営むので、参加してくれたらうれしい、という。夫に都合を聞いてみる。

「ゴルフがあるんだなあ」夫は渋々である。

「だって、お姉ちゃんところも、玲子のところも、夫婦で参加するらしいわよ」

「ううん……」

結局、ゴルフの予定はキャンセルすることになった。

名古屋の姉に電話する。

「三回忌だから、着ていくものは、礼服でなくてもいいのよね？ お姉ちゃん、どうする？」

「いいんじゃないの、華やかな服でなければ」

「うん」

「うちは、花塔婆を立てるの」

「なあに？ 花塔婆って？」

「納骨堂に花は飾れないから、代わりに塔婆を立てるの」

「ふうん。それ、私も立てた方がいいの？」

「さあ、そりゃ、照子叔母ちゃんに聞いたら？」

「そう」

「うちは、夫婦で行こうっているんだけど、ちょっとね、法事の料理代がね、照子叔母ちゃんに負担かと思って」

「叔母ちゃんは、遺産、たんまりもらったじゃない」

「それがね、杉並の家が、相続したとたんに二階の住人が引っ越してしまっ、次の人に貸すのに、耐震工事をするとかで、費用がすごくかかるんだって」

「耐震工事なんか、しなきゃいけないの？ あの家は、叔母ちゃんは遺言書を書いて啓子ちゃんに譲るんでしょ。啓子ちゃんは、もらっても処分すると思う」

「そんなこと、知ったこっちゃないのよ」

「そうね、私のものじゃないから、叔母ちゃんの好きにすればいいのよね」

「まあ、それでお金が要るわけ」

「そう？ でも、法事の一人分の料理代なんて大したことないわよ。遠慮せずに参加してもらったら？」

「うん」

「ご供物は固辞するって、案内状に書いてあるわね、ご仏前はいらないのね」

「そう、だからちょっと考えちゃったの」

照子叔母がお金に困っているとは、思えない。

「ところで、お姉ちゃん、東京に来て、パパとママのお墓参りはするの？ ついでにお墓参りもするなら、私もそのとき一緒にするから、このお彼岸は行かないにする」

父母の墓は、私の家の近く、稲毛の霊園にある。お彼岸に行こうかと思ったが、この秋はなぜか残暑が厳しくて、暑くて、歩いて行きたくないのだ。親不孝な娘であるが。

「うん、そうしましょ。せっかく東京まで出るんだから、どこかに一泊して」

「東京駅が新しくなるんだって。ステーションホテルに泊まれるそうよ。でも、お金、高そうだけれど」

「もう満杯でしょ。いいわ、ちょっとあたってみる。どこにも泊まれなかったら、夜、名古屋に帰ればいいんだから」

「そうね。お墓参りの花は、霊園の管理事務所に頼んでみる」

「じゃ、お願いね」

しかし、霊園の管理事務所は、いい返事をしなかった。花は、二束なら用意するが、一束ではどうも、と言う。

「あすこの花挿しは、一束しか入らないだろう」と夫が言うのだ。だから、断って、花は自分で用意することにする。

ただ、直前になって、一つ問題が起こった。というのは、夫が背中や腰に腫れ物ができて、医者に行ったら、带状疱疹だと言われたのだ。夫の背中に薬を塗ってやる。そして「家庭の医学」という本で調べたら、带状疱疹は「まず、安静にすること」とある。

「大丈夫かな、法事で出歩いて」

「大丈夫だよ」

「ゴルフはどう？ ゴルフは、止めたほうがいいんじゃない？」

「ゴルフは大丈夫だ」夫はゴルフに行きたがる。

「止めたほうがいいんじゃない？ そんなにゴルフに行きたいの？ 親の言うことと奥さんの言うことは聞くもんよ」

でも、聞かない。幸いにして、ゴルフに行っても何事もなく、带状疱疹も良くなってきた。

十月十三日、夫と二人で四谷の長健寺に出発した。私は母の形見の青いドレスを着ていく。もう残暑も過ぎて、寒い冬が近づいてくる気配がする。

JR四谷から地下鉄に乗り換えようとして、丸の内線に乗り換えるのに、夫が南北線のホームにずんずん行く。

「あ、パパ、そっちじゃないのよ」とあわてて止める。

丸の内線のホームに戻って、一駅、四谷三丁目まで乗る。去年は、四谷駅からタクシーで行ったが、四谷三丁目から近いように思えたのだ。

ところが、地下鉄の駅から、どう歩けばいいのか、わからない。照子叔母の送ってくれた地図を出して見たら、夫が怒った。

「地図があるなら、電車の中で見せればよかったじゃないか」

そして、「こんなに歩くなら、タクシーを捕まえればよかったんだ」と文句たらたらである。

ちょっと歩く距離があった。

お寺に着いて、さて、どう行ったものか、前に行く人々の後に付いていったら、納骨堂に着いてしまった。あわてて、元来た道を引き返し、やっと法事の控え室に着いた。もう皆、来ていた。家を早く出てきたつもりだったが、時間ぎりぎりの滑り込みセーフだった。

「花塔婆の二千元、立て替えておいたよ」と姉が言うので、お金を姉に渡した。

すぐに本堂へ。

お経をあげてもらって、お焼香をする。参会者は、去年の一回忌・納骨の時より、少なくなっていた。それでも、よく知らぬ親戚が大勢だった。皆、礼服を着て来たので、平服の私は肩身の狭い思いであった。

納骨堂へ行くと、去年よりお位牌が増えていた。ほとんど皆、赤い字で戒名が書かれている。まだ存命の人たちが、あらかじめお位牌をお願いしているのだ。皆、都心にお墓を持ちたい人々なのだろうか？ お墓といっても、小さなお位牌が何段にもなって、いっぱい並んでいるだけなのだ。旧来のお墓ではない。

花塔婆も、確認した。

瀬波の世津子は、横浜に用があるとかで、会席に出ないで帰った。孫が産まれるのよ、と紀子と言う。世津子は、自分のもらった遺産は、紀子に渡して旅館に融資するといっていたが、その夫が反対してそれはできなかった……と聞いている。そんなことがあって、紀子と世津子の姉妹の仲はぎくしゃくしているようだ。

納骨堂から食堂へ行く間に、姉の久子が私に耳打ちした。

「あのね、去年相続したけれど、あれからまた出てきたんだって」

「何が？ 費用が？」必要経費が出てきたのかと思った。

「ううん、雪子叔母ちゃんの株券とか」財産がまだあったのだ。

「まあ」

「でも、また必要書類を集めて去年と同じことをやると、費用がかかってとんとんなんだって。だからそれはそのままにしておきたいんだって。異存がなければ」

「そう？ いいじゃない」

「よかった。あんたがよければ、いいのよ」

「まあ」私は笑ってしまった。うるさいのは私だけか。

「いや、さっき、控え室で皆に言ったから」

玲子も、紀子も、世津子も、異存はないのだろう。

会席で、去年と同じく、私たち夫婦は、玲子一家のそばの席に座った。玲子と、義弟、その娘真理子、である。

真理子は「私、もうじき三十になるの」といいながら、いっこうにあせりを見せない。

「あせらないのね」と私が感心して言うと、義弟が、「あせらなくていいんですよ」と答える。

「でも、結婚しないと、お宅の血筋が絶えちゃうわよ」

「絶えてもいいんですよ」

「まあ、そう」

義弟は、かわいい娘を嫁になぞやりたくないのだ。

食堂の窓の外に、昔ながらのお墓が見える。持ち主はもともとのこのお寺の檀家なのだろう。

「ぼくたちも、お墓のことを考えないと」と義弟が言う。

「私は、これに、死んだら実家の墓に入れてやるって言ってるんですよ。私も親の墓に入ればいいし」と夫が言う。「これ」とは私のこと。

「そうですよ。苗字が違ってたって、埋葬していいんですよ」

「どのみち、お金は払わなきゃ埋葬させてくれないけれども」

「そうそう、金を払えばね」

「しかし、私も、親のお墓にはほとんど行きませんね。これの実家の墓にばかり行っています」

「そんなもんですよ」

私はおかしくなってきた。「お墓の話って、私たちもお墓の話をするような年になったのね」

「そりゃ、もう仕事もないし」

義弟も、定年退職して久しい。

「玲子はいいわね、いつまでも仕事ができる」

団塊の世代である玲子も、もう六十五歳だが、音楽評論の仕事をしているので、現役である。

「玲子はいいいんですよ。一人でやる仕事だから」

「元気なうちは、一人でやれるわけね」

「でも、今は不景気だから」と玲子が言う。「音楽雑誌もだんだん少なくなって、仕事はあるけれど、お金は儲からないのよ」

「ふうん」

ひとしきり話に花が咲く。義弟は、今回はあまり呑まない。食事もどんどんは食べない。元気がないのだろうか？

肺ガンの手術をして五年たった義兄、姉の夫は、まあまあ元気である。バイタリテあるようには見えないが。頭は白髪である。

さて、これから姉妹三人と夫たち三人に真理子を加えて、全員七人で稲毛の霊園に行くのだ。

「タクシー二台で行けるでしょう。信濃町へ出れば近いんですよ」と義弟が言う。

「信濃町ってどこ？」

「信濃町は、中央線の駅ですよ。四谷の次」

法事が、照子叔母の挨拶で散会して、七人で外へ出る。タクシーは二台、捕まえられた。信濃町へ行き、駅前の生花店でお墓参りの花を買う。タクシーの代金は義兄が、花代は玲子が出してくれた。

電車の中で。

「私、困ったな」と私はブツブツ言う。「私が新検見川からのタクシー代を払えばいいんだけど、千円札がないのよね。五千円札しかなくて」霊園は稲毛の一つ手前の新検見川で降りていくのだ。

「ぼくも千円札、ないな」と夫。

ぶつぶつ思いながら、総武線の各駅停車で新検見川まで行く。

新検見川からまたタクシー二台で行く。

「私、細かくなるよ」と姉が五千円札を両替してくれた。

霊園に着いて、千円出したら、義兄が「いいよ、いいよ」と千円出す。で、私が義兄に続いてお金を引っ込めて車を降りたら、

「七百十円です」と運転手が言う。

「あれっ？ 誰もお金、払ってないの？」姉がびっくりする。

私はあわててお金を払う。

「ごめんなさいね。失礼しました」運転手に謝る。

「ほんとに、お父さんったら、お金を引っ込めたら、引っ込めたって言えばいいのに」姉が笑う。

お墓で。

信濃町で買った花は、二束もあったが、どうやらお墓に生けられた。水をかけて、お線香をあげて、お参りする。

写真の好きな義弟が、カメラで写真を撮ってくれる。もう一枚、真理子が自分のカメラで義弟も入れて撮ってくれた。

これから、姉夫婦は、高円寺の宿に行くそうだ。

「なんで高円寺なの？」

「そこしか取れなかったのよ」

またまた総武中央線で高円寺まで行くの、大変だなと思う。

新検見川の駅で、姉夫婦、妹一家と別れた。夫と二人で家に帰る。

これで雪子叔母の三回忌と両親のお墓参りは終わった。

私のお墓はどうなるのかな。夫が生き残って、いつも家で言っているように、両親のお墓に埋葬してくれるのかな。で、夫のお骨は息子が橋川家の墓に埋葬して、私たち夫婦は別れ別れになって……ま、死んでから先のことは、どうでもいいが。

私は無神論者だから、死後の世界など何もないと思う。何もない……ないのは恐ろしい。無ほど恐ろしいものはない。せめて、書いたものが残れば、と思った。

残るだろうか？ 新人賞がとれないので、作家になれない……だが、最近、私は一つ、道を見つけたのだ。

それは、インターネット。

インターネットで、無料で電子本を作れるサイトを見つけたのだ。自分で編集しなければならないが、労力さえかければ、自分の好きなように電子本が作れる。無料の電子本なら、誰でも自由に閲覧できる。有料の電子本にもでき、有料の場合は、売り上げの三割をサイトの運営者に払う。このサイトはそれで成り立っているわけだ。私はまだ無料の電子本しか作っていないけれど。もう十七冊もできた。もちろん、短いエッセイもあるから、十七冊になったわけだが。

自費出版しても、人に読んでもらえず、同人誌に発表しても、ごく一部の文芸評論家にしか読んでもらえない。書いた以上は、人に読んでもらいたいのに……それが長い間の私の悩みだった

。その悩みを打開する道を見つけたのだ。これは、すごいことだ。

雪子叔母のように、父や母のように、私にもやがて永遠が訪れる。永遠のとき……それが以前のように怖くなくなった。私の書いたものがどれだけ生き延びるか、わからないけれど。

この十月六日で、私も六十九歳になった。過ぎてきた時間は長く、これからの時間は短い。それもできるだけ長くあってほしい、ただ長いだけではなくて小説やエッセイがどんどん書ければいい。そうでありますように、と願っている。

それでも、私はなんで小説にこだわるのだろうか？ 人が、野球をやりたいとか、医者になりたいとか思うのと同じことなのだろう。もう年をとって、普通なら引退しているところだが、私は見果てぬ夢に左右されている。

昨夜も作品を書く夢を見た。

雪子叔母はどうか？ 弁護士の妻として夫を支えるのが、人生だったのだろうか。子供ができなかったのが、人生の挫折だった……叔母はずっとそのことを言い続けていたが、かわいそうに。でも、今は何もない。叔母の冥福を祈る。「冥福」って無神論者の私には、あるとも思えないのだが。